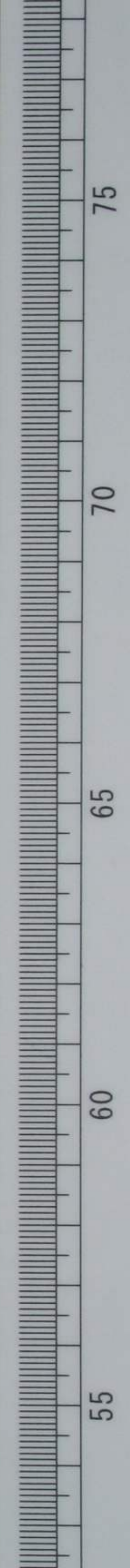




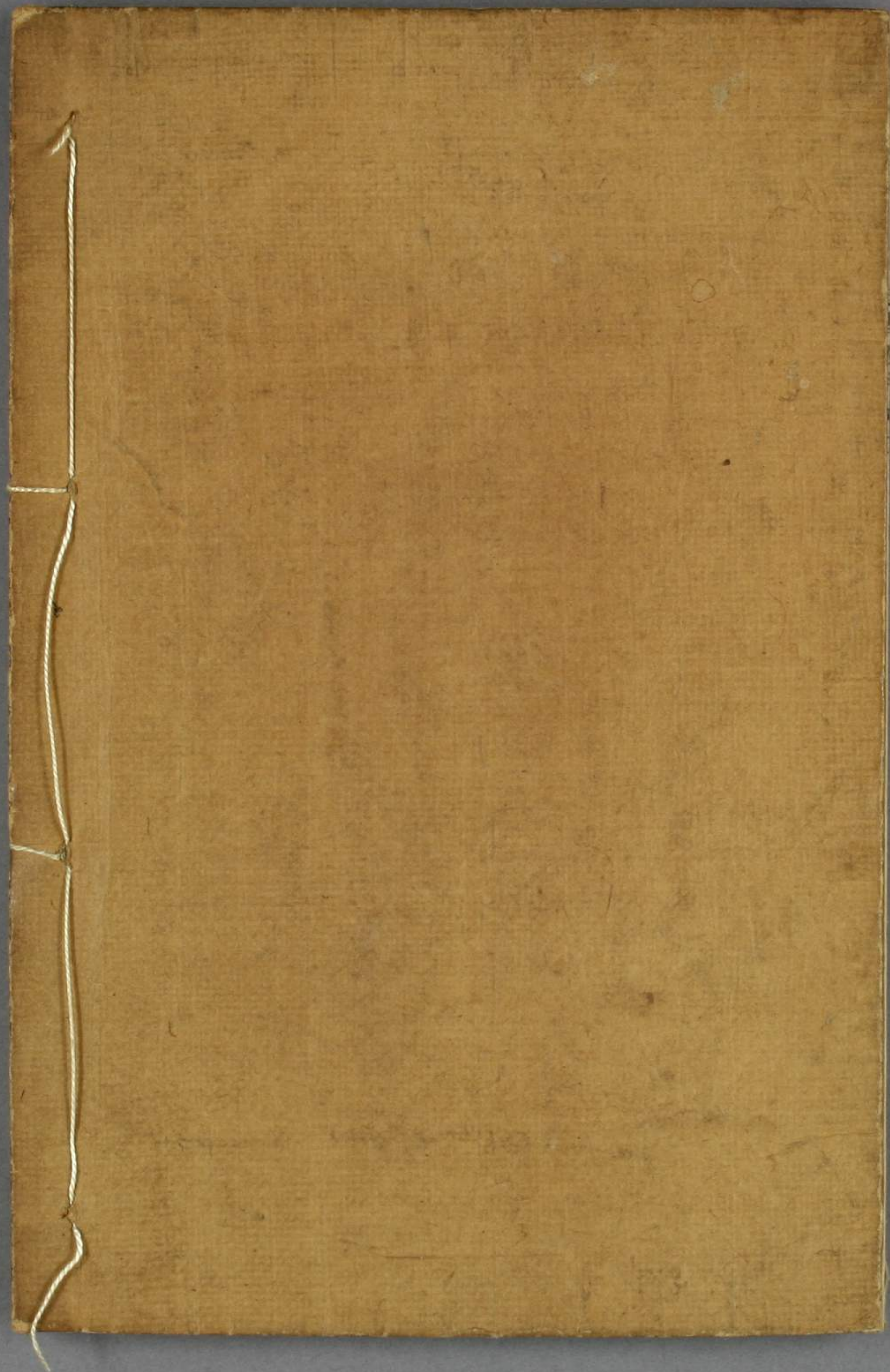
蘆船日記
附蘭文



本間文庫
文庫 14
D288









はしがり

- 一、蘆船日記は大和田大人が明治四十三年一月より五月までの病床日誌なり。蘆船の題號は、古事記足痿の御子蛭子の條より取られしものなる事説明するまでもなからん。
- 一、繭ごもりは、同じ年の七月より九月の、御病危篤に迫らるゝ前週まで、書かれたる隨筆なり。
- 一、蘆船日記も、繭ごもりも、共に仰臥のまゝ、左手に原稿紙を支へて書かれたるなり。
- 一、兩篇共に週刊婦女新聞に連載したるを以て、執筆も、毎週二項三項つゞき、()に物せられたるなり。
- 一、年表は明治三十四年七月まで門人小林儀衛が製したるを大人生前に檢閲しおかれたるなり、其の後の分は日記等によりて此たび編み

たるなり

- 一、著書目録の中には尙洩れたるもあるべく殊に唱歌は一々あぐるの煩に堪へねば特別の者の外すべて省く事としぬ
- 一、終焉の記は後の世の参考の爲めにもとて出で入りし人の名まで大方は記したるが名のしばし見ゆるが必ずしも親しきにあらず家を持ち子もあり且道も遠き人は心ありても來る事叶はざりしならん
- 一、待宵の月かげは婦女新聞に掲載したるものなるが大人の一面を知る参考ともなるべきを思ひて茲に收めつるなり

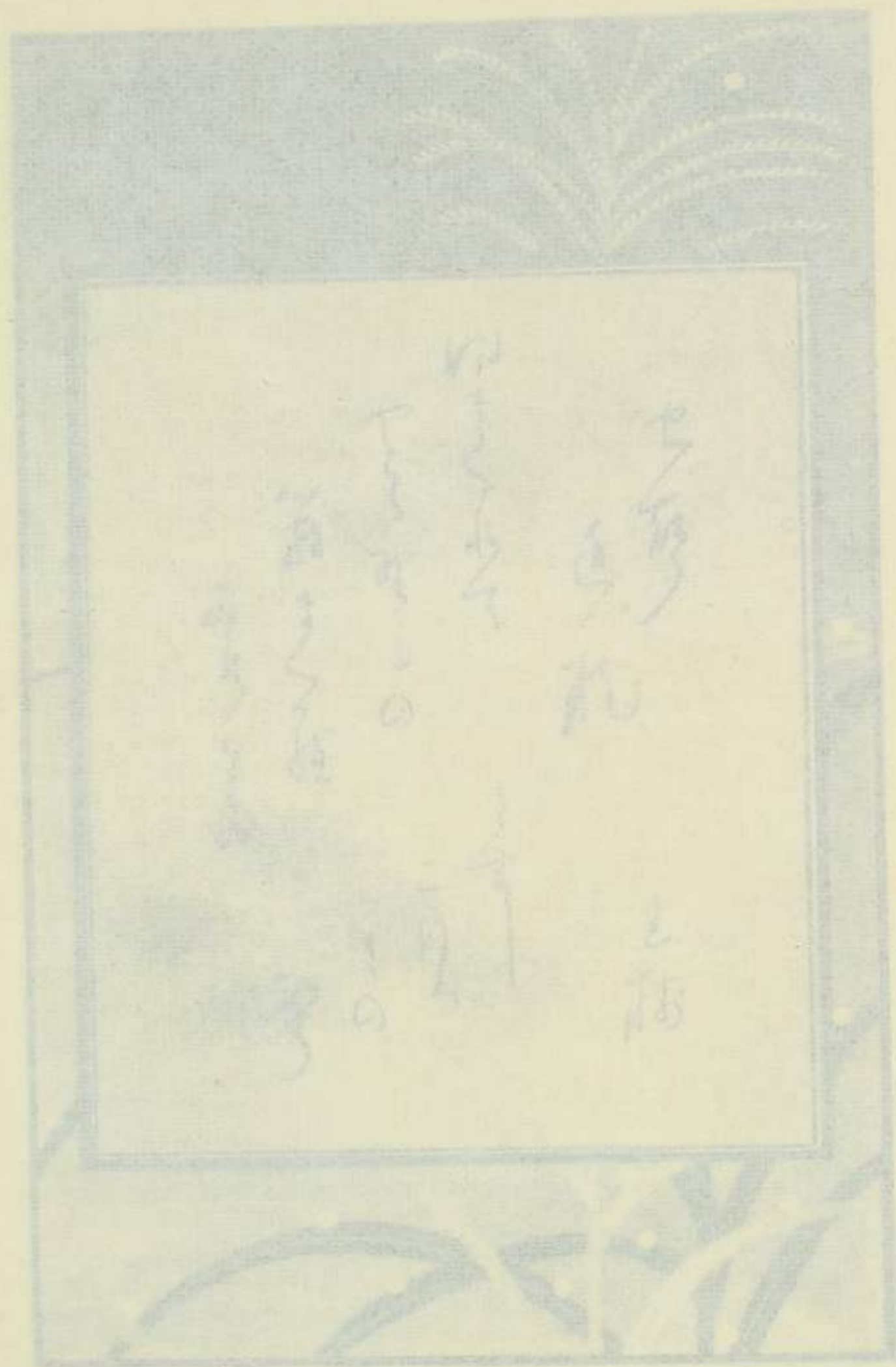
編者しるす

目次

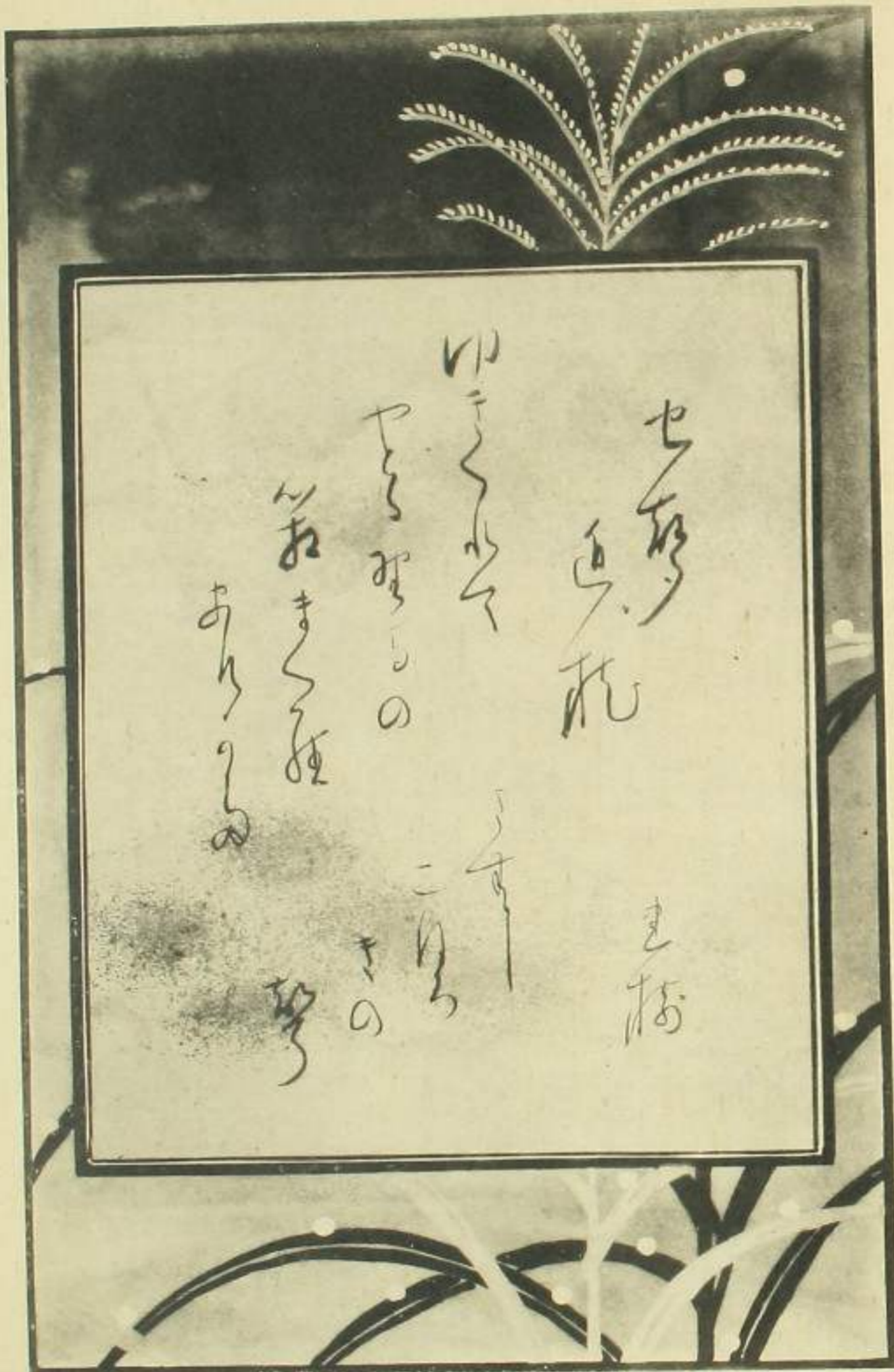
蘆船日記	一
繭ごもり	一六
附 録	
しのぶ草(哀悼歌集)	一
大和田建樹先生年表	六
大和田先生著書目録	一一
大和田先生終焉の記	一三
待宵の月かげ(大和田先生逸事)	一七



大和田建樹先生



大和田先生筆跡



大和田先生筆跡

大和田先生が御紙の上、書かれたる原稿

蘆舟日記(二)

大和田建樹

○成(せい)の(せい)舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)	○舟(ふね)の(の)病(びょう)は(は)癒(な)り(り)し(し)て(て)
改(かい)ふ(ふ)て(て)十(じゅう)日(にち)の(の)久(く)し(し)き(き)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)し(し)て(て)
す(す)れ(れ)ど(ど)極(ごく)致(ち)り(り)極(ごく)ほ(ほ)る(る)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)し(し)て(て)
舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)
が(が)待(まち)た(た)れ(れ)な(な)し(し)し(し)て(て)あ(あ)ら(ら)ず(ず)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)
神(かみ)の(の)代(しろ)に(に)候(こう)て(て)舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)
舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)
舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)	舟(ふね)に(に)乗(のり)り(り)て(て)病(びょう)を(を)癒(な)す(す)

大和田先生が仰臥のまゝ書かれたる原稿

蘆 舟 日記 (一)

大和田建樹

身は	神の	が待	方亦	されど	既ふ	○成	成	成
祝	の代	たれ	有る	木散	七	舟の	舟の	舟の
の	に帰	おし	べし	り櫻	十	正	正	正
膳	りて	しも	と。	ほ。	日	月	月	月
を持	年	あら	。	。	の	上	上	上
ち来	の初	下。	。	。	久	乗	乗	乗
て。	両	。	。	。	し	り	り	り
お	岸	。	。	。	き	ぬ。	ぬ。	ぬ。
屠	一	。	。	。	。	。	。	。
蘇	つ	。	。	。	。	。	。	。
一	上	。	。	。	。	。	。	。
つ	言	。	。	。	。	。	。	。
と	ふ。	。	。	。	。	。	。	。
言	。	。	。	。	。	。	。	。
ふ。	。	。	。	。	。	。	。	。
片	。	。	。	。	。	。	。	。
手	。	。	。	。	。	。	。	。



善心日記

善心日記

大和國...
大和國...
大和國...

文庫14
D288

大和田建樹著

蘆船日記

大和田建樹著

◎戌いぬの正月しょうがつも来きたりぬ。おのれは足あしの病やまひをほ癒いえずして。既まに七十日しちじつの久ひさしき。仰臥ぎやうがせしまゝ寢床ねとこにあり。されど。梅うめ散ちり櫻さくらほゝるむ時節ときせうまでにはもとの身みになるべしと。口々くちぐちに慰なぐさめられて。月日つきひの立たつが待またれずしもあらず。

神かみの代よに歸かへりて年としの初霞はつがき

立たつと聞きくこそ羨うらやましけれ

妻つまは祝いはひの膳ぜんを持もち來きて。お屠蘇とそ一ひとつと言いふ。片手かたての小指こゆびに浸ひたしては嘗なめ試こころむるも。只ただ二栗ふたつぐなり。あはれなる元日げんじつかな。

蘆船日記

吸物の中なるは。友の贈れる秩父山中の雉子なりといへば。
きゞす鳴く秩父の山の松の葉の

まつとは知るや神の助を

教子年のほぎ言ひひに來りて。歳の暮の御歌はと問ふ。

年の坂越えよと鬼は責むれども

足立たぬこそ心づよけれ

など語り出づれば。笑ひ合ひつゝ打ち興ぜし客も。一人去り二人去り。病ある身は物悲しくなりぬ。

よせかへる波の響も静まりて

夕暮さびし磯の松風 (二月一日)

◎南の窓の日影あたゝかに照らして。鉢の福壽草一輪咲き

ぬ。

御佛の膚の色に春の風

福壽無量の花さきにけり

客ありて食事はと問ふ。平生の通りなりといへば。七十日も臥し居てえらい物なりと驚く。さな宣ひそ。森田登喜といひし能の笛吹は。七十すぎて腰立ぬ病に惱みしに。仰向に寝ながら鰻の大井を苦もなく平らげ。笛を吹くに其調子のよきこと。平日に異ならざりしといふ豪傑もある者をなど語りしが。客歸りて後。おのれも其眞似がしたくなりて。謠一二番うたひぬ。七八十日目なるべし。(二日)

◎河合氏より贈られたる寒梅。二枝三枝さきそめたり。

我足も立枝の梅の花ざかり

待つ身たのしき窓の内かな

雪より先に摘までも見らるゝ春の七草。籠の中なる小鉢に
植ゑたるが。枕のほとりに置かれたるは。小澤政胤ぬしの
賜ものぞかし。(三月)

◎岡村諒子夫人見ゆ。いにし日ある人より。師の君は御食
事さへ養うて御貫ひになる程の御病氣と承りしが。あやに
く風を引きて御見舞も得申さゞりしに。まづ打ち臥し居給
ふ御姿を見て。さしも御健康なりし御身のと思へば。涙の
み先だちて物も言はれずとて。泣かれしかば己れも泣きぬ。
かくて物語さまぐ出で。己れも戯言いひ。大聲あげて

笑ひ興ぜしかば。又此御おもゝちの常に替はらせ給はぬを
見て。嬉しさに堪へられずとて。夫人泣き主人泣き。妻又
かたはらにて袖うち掩ひぬ。

梅に待つ初聲よりも諸共に

なきぞめしたる今日の嬉しさ
晝飯ものせんとすれば。私が上げませうとて夫人箸を取り。
茶まで飲ませて得させられしが。今日はさる御方に約束あ
りとて歸られしは一時なりき。(四日)
◎つれづれの餘り子供あつめて。寝ながら小謠教へ試みた
るに。「よしや吉野の」など。すぐに覺えて大聲出して謠ふ。

岩橋の高天の原はこゝなれや

神のしらべも聞く心地して

十三なるゆた子が。私も一つ作りて謠はんとて。

梅が一りん咲いたれば

といへば。次なる十一のめぐみ。

よき句がするウン

と附けたるに。父詞を添へて。

みんなでいざや鼻がうよ

病床のあたりも陽氣になりぬ。(五日)

◎幼なかりし日を明かし暮らし、故郷の空思ひ出でらるゝ

序に。ふご心に浮びたるは寺の事なり。母上の常に宇和島

城下の二十四箇寺と宣ひしを記憶したれば。今數へて見る

に。まづ我家の菩提所なる龍華山。ある時寺詣して僧坊の

方を窺ひ見れば。折しも經文の講義中とて。和尚は廣間の

正面に位し。僧徒老若三十人ばかり。左右に居流れて聽き

ゐたりしが。何となく少年の頃の心にしみて。かゝる大寺

の住持になりても見ばやとまで。其かみは思ひたりき。初

夏の月なりけん。庭には芥子の花美しく咲きあたり。

金剛山は舊藩侯の御寺なるが。いつの年の御法會なりしか。

曉月夜影まだ消えぬ頃より。士族一同參會して。若き人ど

もは庭に出で。芝生を踏みて築山に登りなどせし事ありき。

蓮ある池に月の浮べるが面白きとて。詩を作りし人もあり

しと覺ゆれど。己れはまださる交りの出來がたき齡にて。

羨ましく思ひたるのみなれば。その句をば得聞かざりつ。
観音堂の合天井に美しき花鳥の合作ある潮音寺。閻魔堂に
應岸といふ畫師のかきたる地獄の額ある西江寺。四月八日
に年々行きては甘茶もらひたる泰平寺。繰り返しては。今
も行來する心地もするかな。

延命寺には文僧住みゐて。書畫會なども折々ありしが。小
波南洋畫史に乞ひて。其得意なりし瀧をかきて貰ひし事と。
かの文僧より赤間が關の硯取の話を聞きたる事は。其嬉
しき三十年に餘る今日までも忘れず。時は秋の末。鴟の
聲など後の山の梢に山彦返しつ。
その外には大超寺。光國寺。佛海寺。妙典寺。法圓寺。淨

念寺。淨滿寺。妙源寺。眞教寺。立正寺。選佛寺。龍光院。

神宮寺。宮ノ下にあると中間にあるとは。名を思ひ出でず。
前にいへる延命寺も廢寺となりたるが。猶安國山と吉祥寺
との二箇寺。昔は榮えてありき。今は名を知る人もなきや
らん。

胸に箱を釣り下げ。網代笠かぶりたる老僧の。弓なる腰を
杖もて支へつゝ。願成寺の御膳米をと。家毎に頼みあるき
し其姿は。猶目の前にほのめく者を。此寺も遂に維持せら
れずしてつぶれぬ。豆木様といふ祠のみ僅に。其境内の一
方を残したりしが。今猶信仰せられ居給ふや如何に。(六日)

◎七草粥を例の養はれ終りし頃。萬歲來る。

いつもかく身にしむものか君が代を

祝ふ門邊の小鼓のこゑ

玄關へ呼び入れさせて謠はせつゝ。奥の伏處に聞き居る心こそ春めきたれ。(七日)

◎夜。五月は友達の家の歌留多會に招かれ。歸る道にありたりとて。切山椒を一袋求め來り。父上の御すきなればとて勸む。思へば己も十六の春なりき。御船手といふ處に。會讀か何か有りて行きたる歸るさ。袋町なる店行燈の影に。父上の好ませ給へる巻鮓飯の並び居るを見しかば。差上げたしとは思ども。食物なれば。求め歸りて叱られやせんと。恐るゝ持ゆきしに。宵の間の御つれゝとて。いたく喜

ばせ給ひ。父母打ち揃ひ召し上りて。己等にも賜はりし事ありき。其時の御嬉しさは。三十餘年を経ての今日今夜。始めて思ひ知らるゝも。既に遅しや。

三十とせの昔ながらに今もなほ

おはさばと思ふ親の悲しさ。(八日)

◎朝より雪ちらくと降りては止みたるが。晝より後は誠になりて。寝ながらに見る檜葉も枯木もやうく白く。夜に入りて學校より歸り來りし五月は。地上一寸五分も積りぬといへり。

夢ならでいつか又見ん北國の

天地しろき雪のあけぼの (十一日)

◎満目一白。寝ながら見いだす障子のガラス外には。檜葉の木の埋もれたるが。狸の腹鼓打ち居る姿して立てり。

豊年を祝ふ鼓の音にだに

鳴らさぬ枝の雪の静けさ

今日は家の講義始なれど。此雪にてはなど言ひ居たるに。まづ大久保。次に本間吉田と。令嬢達おひくく集まりて。目黒なる若林の君まで来りしが。五たび道にて轉びしといへり。

歌話をなしたる序に。己れの若かりし頃。郷里の和靈神社にて歌の會のありたるが。會場はいはゆる籠堂にて。唐紙一重ごしのあなたは。手にく重箱携へ来りし田舎の婆ア

さん連中の辨當最中なりしに。披講すみ宴開けて。いつしか隔の唐紙は開かれ。遂には隣同士の大親睦。かの婆アさん達と盃の取り遣りさへ始まりぬ。誰にか有りけん。

榮えます君が齡はながめやる

御城の山松ときはかきはに

とよみて贈りしに。孫が聞いたらごんなに喜びませうといひつゝ。押し戴いて懐に入れたりし顔附。忘れもやられず。おのれも人真似一つして見んとて。

腰抜けてよし足引になるとても

山鳥の尾の長生をせよ

とよみたれば。喜ばれんと思ひしに。思ひきや面相かへて

腹立たるゝの不運に遭遇すべしとは。長生をせよは好けれど。腰抜けてが老人の氣に障りしなるべし。されば祝の歌は。その趣意いかにめでたくとも。材料にめでたからぬ言語等交じりゐてはならぬ事を。令嬢達も心掛け給ふべし。おのれ此歌をよみたる罰にて。今この腰拔病を得たらんも知るべからず。恐ろしき婆アさんが恨の一念よと語りしに。講義中ながらも大笑となりぬ。(十五日)

◎かざし(三女)二階にて琴引く。去年の冬身まかりし姉のゆふ子が。葉山なる我庵にて。月の夜に調べるたるを。遠く聞きつゝ森戸の濱より歸り來りし昔など。思ひ出でられて。琴の音も葉山の松の浦風に

まじりし秋は嬉しかりしを

夕暮尖戸四郎來りて。病の慰にもとて。故郷の寫眞あまた呉れたる中にも。母上の御墓ある龍華山の山門あたらしく作られたるを寫せるが有りければ。

物言はゞ御墓の雪の深さをも 問はましものを寺の松が枝 (十六日)

◎朝七時頃の事なりき。是まで直してもく動かぬ柱時計の有りしを。床柱に懸けて置きたるに。塵拂の當りしたためか。ふとぼんくくと三つ打ちたり。驚きて見れば針の廻り始めたるこそ不思議なれ。わが足も長く休みゐたりしが。動き始めんとする印ならんといへば。おゆたは昨夜父上の

お立ちになつた夢を見ましたといひ。妻は瓶の梅が落花して雪の如く散りぬるは。梅散る頃は立ち給はんご。ある人の言ひしも思ひ出でらるゝこて喜ぶ。

ちるといふ音づれ嬉し昨日まで

咲かばご待ちし梅の初花 (十七日)

◎漢口なる渡邊知吉より。みづから寫したる雨中の楊子江の畫葉書に。見舞狀書きておこす。

共に見んご思ひしものをあなさびし

楊子入江の夕ぐれの雨 (十八日)

◎漢口より此程着きたるゆふ子の遺骨を葬るこて。妻は四谷の宇田川氏に行く。

◎雪はるゝと歸り來りし亡き骸に

ゆきて逢はれぬ父の悲しさ (廿日)

◎野邊送り送るご妻の行くあこに

袂引きかづき音をのみぞ泣く

◎時は來ぬ今はの門出今ならん

◎翼も欲しき床の内かな

◎雪ふりて道も知られじ死出の山

◎問はで我子よ歸り來なゝん

◎足立たぬ父をふしどに獨り置きて

◎門出する子の恨めしきかな

◎雪深くなりぬ。鉦の聲ほのゝ聞ゆる心地す。(廿六日)

◎大森復一ぬし來て。電氣を掛けくれたるに。妻は椽側より。隣の願正寺にて鶯の鳴きたるを聞き給はざりしかと言ふ。

世の常の我身なりせば春告げし

聲のゆくへも追はましものを (廿八日)

◎ある人より。婚禮の料理なりとて。美しき肴ども折に盛りたるを持たせおこせたり。食慾すこし缺乏せる折とて。いと嬉しければやがて打開く。

なさけある君が心の花紅葉

見れば寝てこそ止まれざりけれ (卅日)

◎越後の松村夫人より大きな海蟹を贈らる。

吳竹のふしどを我も這ひ出でて

おどろかさばや雪の下庵 (卅一日)

◎長く赤十字社病院に入り居たりし小澤春雄ぬし。昨夜歿せりこの知らせ來る。あたら若木の花を散らせつるかな。

昨日まで我身に知りし親心

おもひやらるゝ今日の悲しさ

父政胤君の胸の内や如何ならん。去年は長女を失ひ。先をさしは二女を失ひ。身にも覺えある涙なるを。(二月二日)

◎節分なれば豆まきす。五月大聲にて呼ばはれば。子供三人拾ひあるく。家内中鳴り渡りて大きわぎなり。

春風の福は内へと打つ豆に

靡かぬ鬼はあらじこそ思ふ

廣島の學校にありける日。七八升の豌豆を煎らせて手桶いくつかに入れ。寄宿舎の室毎に蒔きあるきては笑ひ戯れし昔など思ひ出でらる。(二月四日)

◎柴田たか子夫人より。

谷の戸を出てぬ鶯なきぞめの

數に入らぬが悲しかりけり

四日の日記を婦女新聞にて讀まれしなるべし。

◎谷かげにほふ初花ゑみぞめの

數には君を漏さざらまし

と返す。あしからは看護に行かんといはるゝも君。少し

よくなれば海邊の別莊に養生に來よといはるゝも君。花も鶯も物かは。人情こそ春なれ。(五日)

◎東京の白魚は三四月なれども。わが郷里の宇和島にては。陰曆正月の半より末に掛けてなれば。今年もそろゝ取るゝ頃なるべし。穂手川の海に入らんとする五六町の處に。網して得る漁夫多ければ。雅人は醤油など携へゆきて。網より移されつゝ躍り居るまゝ。之に浸しては肴とし。瓢箪の酒汲みかはして。枯草を筵に打ち興ずる習なるが。母君のまだ若くおはしつる頃。壯年の士族ども打ちつれてゆきたるに。中の一人酔狂の餘り抜刀せしとて。事大きくなり。一時は士族の白魚くひに行く事を禁ぜられし程にて。名づ

けて白魚騒動といふと語れば。今ならば白魚事件なるべし
 と傍なる五月は笑ふ。其頃ないものづくしといふ唄出來た
 るが。其主謀者は切腹せりとて。『何の誰さん首がない』と唄
 はれ。有り合ふ丸木もて取り静めたる某は。『お叱りない』と
 譽められたる中に。『何の誰さん色がな』と笑はるゝも知ら
 ず。青い顔して眞先に逃げたりしも有りしとぞ。(八日)
 ◎曉に長き地震ありて。それより目さめたれば。足の立ち
 たる事を夢みし嬉しさの忘れぬまゝに。立つといふ歌よ
 む。
 久方の天の逆矛神代より(五日)
 國の鎮めと立つぞ嬉しき

打ち渡す野山の草のめもはるに

春はかすみの立つぞ嬉しき

富士の嶺は千秋の雪を戴きて

青空たかく立つぞうれしき

蘆田鶴の友呼びかはす高砂の

松のときはに立つぞ嬉しき

ほごゝぎす初聲きゝて夏衣

子のため母のたつぞ嬉しき

吉野山花さく頃の待遠に

春の月日の立つぞうれしき

うなる子のつかみて投ぐる小法師の

まろべばやがて立つぞ嬉しき

敷嶋の道のしるべと妻ごめに

出雲八重垣立つぞうれしき (十三日)

◎本牧三の谷の海に臨める岡を占めて。原はる子嬢が父ぬ
しの庭園は作られたり。玉躍らせつゝ走りゆく流を挟みて
起き臥す老梅。晴れたる雪を水に移して。春おもしろき處
なれば。去年も招かれて遊びし事。此頃にてや有りけらし。
木のもこの床儿に腰掛けるたりしに。家の愛犬ポチこいへ
るが。尾を振り尾を振り來りしを。父ぬし搔き撫でつゝ。

梅さいてポチのからだも香りけり

こ言はれたるが本になりて。くだらぬ歌など出来る。ポ

チ流なりポチ的文學なり。令嬢や夫人の笑はれたるより
始まりて。

梅さいてポチの文學起りけり

梅さいておでん二串たべにけり

梅さいて稻荷の鳥居立ちにけり

梅さいて商賣いやになりけり

梅さいて奥様ひさりだまりけり

梅さいてすぐご試験になりけり

中に令嬢が英語の先生ミス、ゲーツの在られたるが。これさ
へ口を出だして。

梅さいて烟草のみたくなりけり

戯れられたるに興いよく加はりて。

へ口梅さいてミス、ゲーツまでうめきけり

中、梅さいて歌の通辯こまりけり

など果は口さがなき徒も交じりたる一日の樂しさ。又繰返

さんにも達磨なる身を如何にせん。

梅が香は袖に残りて朝露に

ぬれしのみこそ現なりけれ

今朝の夢に寒月庵に遊ぶと見てさめしかば。よみて令嬢に

おくりぬ。寒月はかの園内の茶室の名なり。(十四日)

◎大阪の田中常憲君より書信あり。曰く。難波の春色先生

を待つと。又新著「昔の春」を寄せらる。中にも。

桃櫻さける林に午後の日は

薄う流れて少女機織る

山松の木のみくを紅葉しぬ

秋十月の志貴の山寺

吉野川櫻が陰に舟よせて

花ちる寺の鐘の銘よむ

紀の山や何をか語る秋晴れて

女山津の山薄眉にして

などいごをかし。(十五日)

◎復一ぬしより母上の手打なりとて。蕎麥を恵まるゝと。

三たびになりぬ。

思川たえぬ流れの長き世に

離ぬ君がそばぞ嬉しき

思川はぬしが故郷の川の名ぞかし。(十九日)

◎復一ぬし又。國に歸りたる土産なりとて。鮎を贈らる。

肥えて七寸。寒中にはいさ珍し。

世に深き人の情も汲まれけり

川瀬に香る春の若鮎 (三月一日)

◎下總の安食といふ地は。印旛湖と利根川を左右に受け

て。鶯の宮の森神々しく。何もなく心に叶ひたる處なれば。

月毎のやうに遊びたるに。今は得ゆかぬこと半年以上にな

りぬ。

門内に林なしたる何がし寺名を忘れつ)の梅は。此頃盛なる

べく。鶯の岡の花のふくらむも。十日さは待たざらんと思ふ

に。長門橋に立ちて筑波の霞む朝景色を。見られぬ春こそ

悲しけれ。母が手製なりとて。歌習ふ乙女の持て来て贈り

し草餅。今夕沼にて網にせしとて。宿りの妻君が焼きつゝ

もてなしし若鶯。何かは思出の種ならざる。(三月三日)

◎柴田夫人より小包きたる。開きて見れば大きな折に歌

枕と書きてあり。まづ何やらんこ不審起りぬ。名所々々の

畫葉書ならんか。寫真ならんか。いや、折大きければ名

物ならんなど。想像とりくにて蓋おしのくれば。美濃干

大根ぞ出でたりける。其下よりは和洋干菓子の花紅葉。又

其下には名も落花生の香ばしきを。濱の眞砂と敷きつめた
るは。噛みつゝ歌を考へよとにやあらん。嬉しき物をも恵
まれたるかなといふに。妻は猶こそ底に物あれといふ。紙
一重まくりて見れば。こはいかに。赤地に白の胡蝶を染め
たる友禪うつくしき枕の袋を。手づから縫ひて贈られたる
なりけり。

寝ながらに見らるゝ四方の歌枕

散らぬ情の花もかをりて

やがて書葉書にしるして。(七日)

◎船形の寝風呂は座敷の内に運び込まれ。手ん手に湯を入
れ水をうめて。いざ湯あみせよといふ。何がさて百四十日

ぶりなれば。夢にては無きかと思ひくゝ四人に昇かれて。
早くも波あたゝかき湯船の中にぞ仰向に入れられたる。折
しも春雨いとしめやかに降り出でたりければ。折

我身までかゝるも嬉し咲く花を

催す春の雨のめぐみの (廿二日)

◎二階なる書齋には別れて。南受けたる八畳の座敷に伏す
事。まさに半年に近からんとす。されども方々より贈らる
ゝ折節の花。折枝に鉢植に。枕邊を取圍みて絶ゆる事なく
足は歩かねども。天の下の花園を集めたる心地して。観ず
ればわがための安樂世界。上品蓮臺も是には如何でと。思
はるゝ折こそ多けれ。今朝も物清げなる姿して並び居るを

見れば。福壽草の黄なる。胡蝶花の紫なる。雪割草の霜よりも白きは。かたはみ草のへによりも紅なる。笑顔をかはし。散りのこりたる薄紅梅は、盛久しき丁子に香りを譲らんとするが如し。庭の木蓮は咲かずやといへば。まだ十日ばかりは間があるべし。おみ足の立たん日と苔の破れん日。何れか早き。競争し給へと。解洗衣張りゐたる妻はほゝるむ。(廿三日)

◎お相撲さんなご六七人のお客ありと。子供の告げ來れるに。妻いで見れば。思ひもよらぬ黒川能の先生方。此度軍人將校婦人會の總會餘興の爲。はるく羽前の國より出京せり。ふりはへ柴の扇を敲かれたるなりき。劍持忠

宗上野丹宮清和政右衛門齋藤恒吉秋山孫六劍持伊勢治等の諸氏。お相撲と見しも理り。鬘戴けるも交じりたればなり。病室ながらも酒出だしなどして。主人まづ例の仰向謠を猩猩など謠へば。客も興じて高砂羽衣の二番を發聲す。彼催は明日にて。番組は式三番高砂安宅紅葉狩なりといふに。行きて見られぬ身の悲しさよと嘆けば。最上川にも汽船の道の進みたれば。來ん夏は再遊思し立たせ給へと。慰めらるゝも嬉し。

寝ながらに先ぞ聞きつる高き木に。うつらんとする春の初こる。思へば黒川の草分せしも。早八年になりにけり。(二十四日)

◎曰く。櫻の苔ふくる頃には。這うて椽側まで出でらるべし。曰く。蝶々よりは早く夢さめなん。曰く。木蓮花の咲くのと競争せよ。曰く。四月十五日には快氣祝が出来さうなり。曰く。お足の立つた夢を昨夜見ました。曰く。何。曰く。見舞はるゝ毎に。暗夜の光を胸に示さるゝこそ何よりも頼みの力なれ。此頃も隣の寺にて。日毎のやうに穴掘る音を聞きては。無常を感じる心深くなりぬと云へば客これを慰めて。世に死する人の多き間は。我行く番の來る事なしと思へと言ひ。臥處を取圍みて。友人家族の圓居せるが。涅槃像の畫にさも似たりといへば。御涅槃は二月に濟たれば。今度は四月八日の御誕生こそ待るれ。門人

の乙女は祝ひ直して打笑ふ。(二十六日)

◎新聞にてほのかに傳へたりし音づれ誠となりて。小杉楹

邨翁が今はの知せは來りぬ。

山吹の露より滋く黒框の

うへに涙の降るあしたかな

翁に初てまみえしは。明治十七八年の頃。北神保町なりし史學協會の席上にて。蓮池の夕風すゞしく。花の香おくる夏の日なりしが。去年の春にや。車上どちにて道に行逢ひしぞ別れなりける。翁の情を受け教を蒙りたる事。今更數へも盡されぬものを。あゝ世は夢なり。一度も枕邊に侍する能はずして。翁は青山の土深く隠れ給ひぬ。(四月一日)

◎大阪の田中君より小包着く。病の床の慰草にもこて。福引數多封じ入れられたるこそ嬉しけれ。家舉り集りて。打ち興じつゝ開き行くに。「あらざらん此世の外ほかの思出おもひでに」といふ札附きたる中よりは。足袋の片足あらはれいでたり。「今いまひごたび」とは秀句なるかな。早くも我足わがあしにはきて來よとの心なりとは知られたれど。やもめの身にてはとつぶやきたるに。又一包より今一足袋こそ出でたりけれ。「割れても末すえに」とは。拔りもなき目出度き賜物。天王寺に君を訪はんも三四十日の内なるべし。

蕨つむ春野の野道わかれては
また廻りあふ蝶のうれしさ

朧夜の影ふむ花の梅屋敷

「我わがふるさこに歸るとおもへば」としるせるには。「玉章もことづて、まし春の雁」とて。畫葉書の入りたるに。令夫人歌あり。

我宿の庭のさくらも昨日今日
君まちがほにほゝるみにけり

返しす。
思ひやれ花もほゝるむ難波江の

春に漏れたる芦の枯葉を
畫は令妹の筆にて。花のもこの團子茶屋に。茶盆提げたる

女の立ちたる姿 見るに心も浮き立たれぬ。

盃も取らで花みるつれづれを

なぐさむる君も世にはありけり

此春は獨り草餅の天地。喜ぶものは醫者様と妻のみ。(七日)

◎白木蓮いよ／＼盛になりぬ。いつも春は旅に浮れて。花

の頃には得あはぬ習なりしを。病の患も全く無き世にはあ

らざりけり。

此花の紐とく頃は吳竹の

ふしど離れて見んと思ひしを(八日)

◎同じくは近くて花を見たとはいへば。講義に来れる諸嬢

引いたり押したりして。寢床の移轉を手傳はれぬ。瑠璃色

の空に。胡粉もて畫がきたる如き梢の。吹くともなき風に

ゆらめくけしき。おのが庭とも思はれぬ程なり。

窓近くふしど移して見る花の色香も人のめぐみなりけり

◎松浦醫伯が薬取りに子供を遣はしたるに。是を奥様よ

りとして差出だす。風呂敷包を開けば。春の野風の香り満ち

たり。

出で、摘む心の野邊の土筆には

花の嫁菜も立ちまじりけり

諸共に摘みしは昔一人だに

野にも得出でぬ春の悲しさ

麻布の飯田氏にて一日百首せしは。十年ばかりの古へ。庭つゞきななる廣野に出で。鬼遊びなどしたりし時は。夫人まだ春木令嬢にていさ若く。おのれ負けぬ氣になりて駈け廻りたるを。心は老いねど立たれぬ驚馬こそ悔しけれ。(十二日)

◎京城なる宮原小治郎君より文あり。「玄海も渡るべく。韓國縦断もし給ふべし。鴨綠江も鷄冠山も。二人してこそこ樂しみしものを。先生の御容體果して之に應ずべき御勇氣おはすや否や。……七月中旬には歸朝致すべく。八月下旬歸韓の際には是非御供申したく云々。」など見ゆ。

此秋は袂に占めて歌よまん
虎伏す野邊の竹の夕風

打ちつれて鷄冠山を越えん日の

夢今宵より身を襲ふらん

と返り事す。(十七日)

◎一人して床を這ひ下り。兩手を力に西の眩懸窓まで出で庭を見る。反橋かけて枝打ち垂れたる山吹。暮れゆく春を留め顔なるもあはれ深く。乙女椿の四花五花。苔の上つくしく散りあたるなど。病人の天地はじめて開けぬ。庭櫻一枝折らせて。住吉の丸太格子より持ち歸りたる古徳利にさせば。花も昔を語るに似たり。

住の江のおこひ乙女は誰と出で

松原つたひ堇つむらん (十八日)

◎一枝子の君より。大きなる風呂敷包一抱もて来て恵まれ
たるを見れば。わがための初竹の子なり。

ちる花の雪の下なる竹の子を

見よとて掘りし人の嬉しさ

目黒の山の春の朝露。いかに裳裾を濡ほしつらん。(十九日)

◎舟橋夫人訪はれ。間もなく櫻井夫人訪はる。お互に七八
年ぶりなりとて。喜ばるゝ事甚し。當時の國文會にて共に
學びし方々は。大方奥さんになりて。お子持になられたる
は誰々なりと數ふれば。二十人ばかりの人口こそ殖ゑたれ
ご。笑ひ合はるゝ序に。先生此お孫どもを集めて。第二の
國文會を起し給はんは如何にご。舟橋夫人いはる。

榮えあひて共に昔や語り出でん

竹の子の千代の千代まで (廿四日)

◎小澤政胤君とぶらはれしかば。庭の山吹の盛なるを肴に。
妻の酒すゝめたる折しも。松浦國手の來診あり。君も一つ
試み給へとて。みづから干したる盃を向けらるゝを。恐る
く手に取れば。三盃迄はとて許されたり。

あな嬉し花の命のある内に

さゝの命もよみがへりつゝ

半年を経て此露を嘗む。顔の躑躅もいと恥かし。(廿六日)

◎隣の願正寺にて。親鸞上人六百五十年忌の大法會あり。
二十人の稚兒など出づるとて。笙箏築の音面白げに聞ゆ。

蝶鳥の舞かあらぬか山吹の

垣のあなたに物の音ぞする

病人の心は小兒に歸りて。行きて見たくてたまらずといへば。負はるゝ物なら負ひて見せ參らせたき物なるにこそ妻は言ふ。

參詣せし子供等歸り來て。散らしたる蓮の花びらを拾ひぬとて見せたれば。其裏に。

ゆく春を隔つる垣のあなたより
涼しき國の花ぞ散りくる

十一歳なるがいふ。和尚様が何か御話をなさつて。『私には』と仰しやつた時には。皆涙をこぼして聞きゐたりしが。や

がて手を叩きたりしと。私には身に餘る大法會が出来たりとて。壇家信徒の喜捨盡力を謝せられしなるべし。(廿八日)

◎平井とみ子の君訪ひ來て。美人草の白きが一輪咲きたる小鉢を。籠に入れたるまゝ贈らる。

情ある君が心の花乙女
むかへば語る面持にして

折しも大掃除の最中なりしかば。禪掛になりて働き得させられたるぞ嬉しき。(五月七日)

◎昨日の花は紅なるが新に咲きぬ。
唇を花も開きて語るらん

きのふ一日の樂しかりしを(八日)

◎五月は大成中學校の遠足なりとて。曉に起きて箱根に立つ。足立たぬ身にはいご羨まし。

美人草又一輪ひらく。今日のは桃色なり。

色かへて今朝もさきぬご幼子は

父の眠りを呼びさましいふ (九日)

◎今日のはかの花九輪になりぬ。今を盛の美しさ。喩へんに物なし。

訪ふ人もなくてさびしき雨の日を

慰め暮らす君のうれしさ

◎妻沼なる長谷川かう子の君より。昨夜は物ぬひさして眠りしに。先生の御足の立ちたる夢を見たりしごて。

いたづきのふしど拂はん君がため

たつも嬉しき夏ごろもかな

ご有れば返言の奥に。

時鳥初音さゝても夏衣

まだたちあへぬ身こそつらけれ

君は養蠶の始まる前に四五日の暇を得たりしとて。遙々我病看護のため出京して家に留まられしも。三週間ばかりの昔になりぬ。今は桑つむ業の忙はしさに。歌おもふ暇もなくてやあらん。(十五日)

◎七十五年目に來る天上の賓客ハレー彗星が。太陽面を通過するは今日ぞこいへば。何か眼に遮るものあるべしとて。

其時間なりといふ十二時頃。妻は盥に水をたへて。椽側に持ち出だしたるが。何やらんうつる物あり来て見給へといふ。折しも講義の日にて集まりたる人たち。我もくとのぞき見てはあれよくいへば。臥して居る身も心あぐがれ。助けられつゝ這ひ出でたり。時に風いでゝ若葉吹き動かせば。日の影亂れて見こむる能はざりしを。暫くして少し静まりたる絶間に見れば。白き碁石のやうなる物ありて。太陽面に漂ひ居るなり。かくて眼を離せば。空中には黄なる雲飛び。木の間くには赤き烟の靡きをるやうに見ゆるよといへば。誰もくしかなりといひしは。日光を見つめたりし爲なるべし。報知新聞の夕刊にて見れば。

天文臺にても氣象臺にても。何の見得たる處なかりしといふこそ。面目なけれ。かの碁石めきたる彗星こそ。目の夢みたる幻にてはありつらめ。夕方は見ゆべしこの事なりしかど。かひなくして日も暮れぬ。

まれ人は待てども見えず夕空は
入日のよちの雲あかくして

尾の中をゆくとも知らで天つ日の

よそに心のあくがるゝかな

大地を包みてあまる星の尾の

長き恨を誰にかこたん

かの尾の中に包まれたりや否やも。いまだ確かに分らずと

聞く。(廿日)

◎薄暮の頃、帚星が見ゆるとて。人々願正寺の坂の上さして行く。歸り來りし子供に問へば。若松町の交番の屋根の上に。蜘蛛の巢かけたるやうに薄く見ゆるといふ。

我上をゆくと知るく言の葉も

かはさて君を歸しつるかな

いよく西の空まで逃げ去りしなるべし。庭の若葉だに茂らざりせばこ。窓開かせつゝ眺めやれども。常見る星の一つも漏れ來ず。(廿二日)

蘆船日記終

おもしろい

繭ごもり

◎妻沼の教子より自製の繭を贈り来る。病の床に長く在る身の。ながめて目をだに慰めよこなるべし。

思ひやれ君が衣に引く糸の

長き年月まゆごもる身を

母が飼ふ蠶のそれにはあらで。いふせき心を拂ひがてらの筆又執らんとする折節なれば。やがて巻の名としつ。

◎友達来りて旅の事話し合ふ序に。一番おいしかりしは何ぞこの問題おこる。おのれは今までに唯二つあり。播州の松めぐりしての歸るさ。加古川停車場前の一膳飯屋にて。

新しく煮て出だしたる竹の子と。日向の霧島山より宮崎に
行く乗合馬車の立場にて物しつる。豚肉のごツた汁とは。
年月隔てゝも忘られずと言ひしに。美人を見たる數はと問
ふ。そは指も屈しがたかるべけれど。夕張の炭山見たりし
時。大きなる十能やうの物もて、石炭の塊まりをすくひて
は運び出だしゐたりし娘ご。大東岬に汐風呂あみに行きた
りし時。バケツ片手にかひがひしく。素足になりて汐汲む
岩道をおりのぼりしたりしお千代こいひし女の童ごは。晝
にもかゝばや。詩にも作らばやここそ思ひつれ。夕張なる
は折も折とて。薄色紅葉を連想し。大東なるは冬暖なりし
頃なれば。磯菊の風に靡く面影を残しぬ。

◎寒き夜遅く熱海の温泉宿に着きたりしが。やがて湯に入
り暖まりゐたりしに。廣き湯船の向の方に聲ありて。健康
なる御身こそ羨ましけれといふ。始めてそなたを見れば。
打ち煙る湯氣の中より。骨と皮なる人は首を出だして。我
方を見つゝ獨りごつなり。その凄かりし目附は。旅寢の夢
を襲ひし夜半もありき。肉月に市の字なやめる人にてもや
有りけらし。
去年の夏は。顔に腫物の出来たりしため。朝起きて手水使
ふ事も思ふ儘ならざりしかば。子供を連れて見に行きたり
し活動寫眞に。獨乙の小學兒童が修學旅行して。數十人一
度に。快く冷水汲み取り顔洗ひ居る處が有りしを見て。早

くこんなになりたしと。羨みたるも可笑しかりき。

さて今の我身は如何に。足の立たぬ事ほごんど八箇月。喇

叭を鳴らして豆腐屋が来ればそれも羨ましく。納豆々々と

呼びあるく女の聲を聞きても又羨ましく。およそ世に足の

立つ物としいへば。羨ましからぬは一つもあらず。唯かの

湯氣の中なりし人のみぞさしも無き。

◎わが伯父君に武道一偏の人ありて。風流の心などは更に

持たれざりしが。いつ習はれけん。羅生門の小謠一曲覚え

居て。酔ひ給ふと必ず始まる。おのが妹の嫁に行く日も。

高砂ならで。「忍ぶに傳ふ」など發聲し給ひしは。昨日今日

の心地すれど。數ふれば三十四五年になりぬ。是や伯父君

が「つくく」との聞き納めなりけん。

二十年ほどの昔にもなりぬらん。友常何がし翁さて。謠の

會にて屢は出あふ老人ありしが。盃さへ出づれば。「飲むか

らに」と必ず吟じ出ださるゝをもて。給仕に立てる童部は

『のむからさん』と名づけたり。後には自らも心得て。のむ

からの翁としるしたる盃配られたる事もありしをと。思ひ

いづれば。げにも薬と菊の下水。今も健かに汲み居らるゝ

や。聞かまほし。

◎夜廻りの仕方にも様々あり。三河のある家に宿りしに。

拍子木打ちたる跡には。必ず南無阿彌陀佛が三つ四つ附く。

目のさむる度に。尊くも思はれ異様にも聞えつ。下總の安

食にては。ガラン／＼といふ物音。暗夜を縫ひて時々道
を行く。あれは何ぞと宿りの女に問へば。夜廻りなりと答
ふ。何の音ぞと問へば。鳴子のやうなる物を背負ひ行く響
なりとぞ語りし。

札幌にては。夜の更くるにつれて。こゝにもかしこにも盤
木打つ音起る。それも同時にはあらず。少しづゝ間をおさ
て。遠くなり近くなるやうにも聞ゆ。こゝの夜廻りは何物
をも持たずして。町々の木の枝などに掛けてある盤木を。
同じく釣り提げてある鐘木にて鳴らしては。又次の町に移
り。同じやうにする事なるを後に知りぬ。始は寺の勤か
も思ひ。熊など追ふ業にやなどさへも疑ひつる可笑しさよ。

◎何かの會合に互縁會の名あり。故はと問へば。五圓の會
費より起れりといふ。誰やらが始めたる謠の會に互選會の
名あるは。仕手脇等の役割を互に選み合ふより出でたりと
言ひしは表。實は五錢の鰻井(價安かりし頃なれば)に起
原せりと聞きて。大笑したる事ありしが。似たる話もある
ものかな。
◎和歌山にて。病院長の家にて酒飲みあけるに。先生シユ
トウは如何にご主人問ふ。植瘡瘡の事かと思ひて。四五年
前にしたる儘なりといへば。いや鹽辛の事なるをとて大笑
となりたる事ありき。かの地方にては。鹽辛を酒盜と稱す
るなり。酒盜人と讀まば。狂言の題號にもなりぬべし。

◎九つか十の年なりけん。家こそりて船遊に出で行きたる日の留守番を。しげといふ女中と二人にてさせられたるが。お八つなりとて皿に盛られたる龜屋餅を寫生して。その上に『るす番や御盆の上の龜屋餅』と書きたるを。しげは甚しく感心して褒め立てしかば。己れも圖に乗り。母上の歸り給ひしに見せ申しよに。そんなたべ物の事など書くものでないさ。教へられたる事ありき。此頃ある少女の汽車にてよみたる歌とて。『静岡で鯛飯取つてたべたれば。うまくてく、たまらないかな』といふを見せたるが。ふと昔の事の思ひ出でられて。◎誰が博士になりたりとか。まだ得ならずとかいふ話をし

てゐたりしに。僧ありて。弘法大師は僧正にもならず。僧都にて終れり。鬼界が島の俊寛と同格なりしとぞ言ひし。◎おのが家の側に坂あり。その坂の上には車夫の溜りあれば。いつも車夫を呼びに行くに。坂の上くと言ひ習はしたりしが。いつの間やら。子供等までも田村麿といふやうになりたるは。田村の謠を聞き附けたる故よと。いとをか。◎餘りの暑さに、常は塞き置く二尺の腰窓を開かせ。臥しながら打向ふに。玄關前の八つ手柴は。緑滴る葉を打ち垂れて半ばこなたを掩ひ。その間より入りくる客人。門前をゆきかふ老若まで。簾ごしに眺め出だされて晝の如し。夜

ともし火など附きたらんには。琴の音もやなど。道ゆく人
には想像せらるべしと思ふに。内は薬瓶くさき室なるこそ
わびしけれ。

◎足立たぬ病になりたる始は。健康なる時の事をのみ夢み
て。覺めて後いと悔しかりしが。少し長くなりて後は。五
重の塔の頂上に登りはしたるものゝ。おりんとするに足さ
かずして困りたる如き。病の苦しみを夢中にも忘れざりき。
さて漸う下り坂に向ひたる此頃の夢には。直りて二足三足
歩けたりとか。踏み伸ばす足の自由になりしかば。立ちて
見たるに思に外らくなりしとかいふやうの希望をのみ見る
事になりぬ。

いつぞや來りし盲目の按摩に夢の事を問ひしに。私は十七
の年に目を失ひたりしが。目の明きゐたる時に見たりし人
の顔などは。今も其まゝに見る事侍れど。つぶれて後の事
は。唯聞くのみにて見る事侍らずと語りぬ。
◎我家の前を通る豆腐屋は七八人もありぬべきが。中にも『
笹の雪絹ごし豆腐』と呼ばはりあるく聲のよき。節の奇麗さ
子供等は唱歌のやうな聲打ち揃へて眞似せぬものなし。
上野の汽車の發する毎に。王子、大宮、高崎、長野、直江
津線が出ますなど。乗客に觸れ渡す驛夫の中に。一人の聲
の大きなが有りて。さしにも廣き待合所を。繰返し〜
呼ばりあるけど。朝夕晝夜聲の枯れたる例なし。今日は

口上の本家なればよく分る。名代の時は側へも寄り附けぬなど。人の評し居たりしをも聞きぬ。豊前の行橋にて盆踊見たるに。踊りつゝ歌ひるたる女。編笠の下にて顔こそ見せぬ。その美聲なるには誰も感じて。口々に褒めぬは無かりしが。先生あれを御存じかと。同行者問ふ。もとより知らぬよといへば。昨夜お給仕に出でたりし宅の下婢なるにとて笑ひき。よし鶯ほどにはなくとも。よき喉を持ちたるは損なるものにあらず。◎東海道の下り汽車なりき。乗合に能辯家ありて。頻に宗旨の話を始めたり。加州人にて眞宗東派の信徒と見ゆ。十

「私の國にては。東門主お通りあれば。お腰（お腰懸の略）休息の意。願ひたるもの六拾圓。お宿を願へば百貳拾圓を納むるなり。三井の番頭附き居りて之を受取る。おかうぞりと稱へて。剃刀をちよと頭に乘せて戴くもの。下等二十五錢。中等五拾錢。上等壹圓。本願寺に来る郵便の數は一日千枚以上に上る」など説き誇りつゝ。お骨を納むる者。壹圓にて願ひたるはよけれど。よきもあしきも粉に春かれて。百人一つに丸めつゝ土に入れらるゝとは。何と高い物にあらずや。春の御講秋の御講に。田舎より上り集まる爺、婆どの。頼まれて五圓拾圓と持行き。受取を下されといへば。待つて居よとて。七日以上も留めらる。其間本願寺

の賄にて。其料を取らるゝに至りては。何とよい商法家で
は御座らぬか。されども智恩院などが。六拾萬圓の借金に
困り居るに比ぶれば。眞宗の如く富みたるはあらじ」など
いひて。得意げに笑ふ。「あなたは何」「私は禪宗。」「禪宗ほど
横着な宗旨は御座らぬ。尻が腐つてもいごかぬといふに非
ずや。」「あなたは何。」「法華で御座る。」「やれ賑やか宗旨よ。朝
から晩までテレツクドン。」「如何にもよう勉めた物で御
座る。」「など語る程に。矢矧川を渡り岡崎に来る。話は轉じ
て家康の事となり。岡崎味噌の品評となる。
◎軍人二人あり。甲は謠が好にて乙は嫌なりといへば。其
故を問ふに。乙曰く。僕は學校に在りし頃下宿屋に居たり

しに。試験中。毎日々々隣の部屋にて呻り立てられしが。
癢に障りたるより。今も虫のすかぬ處となりぬ。甲曰く。
僕はふと兼平の謠本を見たるに。「痛手にてましまして。た
まりもあへず馬上より。遠近の土となる。處はこゝぞ我よ
りも。主君の御跡を。まづ弔ひてたび給へ。」とありし文句
に感激して。今井四郎の精忠。かくもありけるかと。一た
び肝に銘せしが。謠の面白さを知る始なりきと。
◎兵士の片膝立て。鐵砲を打つを。折敷と名づけたりしが。
今は改められて。人膝打の構といふ事になりぬと。此頃入營
せし人は語りぬ。此折敷に付き可笑しき事あり。今は二十年あまりの昔。高

等師範學校にて。宇治拾遺を生徒に輪講せしめたるに。
 「折敷の大きさはかりに出でたる岩あり。」といへる文句を解
 釋して。兵士一人が折敷にて發砲の出来る程の岩なりと。
 いひたる生徒ありき。兵式體操が宇治大納言時代から有り
 しにやと。打ち笑ひたりしが。今よりは兵士上りの人にて
 も。斯かる誤解を來す人もなからん。
 ◎鐵道唱歌を作りし時は。電車といふ詞なかりしかば。電
 氣鐵道を其まゝに。「急げや電氣の道すくに」としたりしを
 今なほ道ゆく子供などの謠ふを聞くに。耻かしき心地す。
 ◎明治六七年の頃。郷里の學校にて。始めて小學讀本を教
 へらるゝ事になりたる時。「帽を着たり」とある帽の字は何と

讀むぞと妹問ふ。パウなりと答へしに。其後先生からカブ
 リモノと教へられたりとて。兄さんは違うたと。妹の威張
 りたる事ありしが。其より半年ばかり經て。カブリモノは
 悪し。パウに改めよといふ事になりぬと。妹内々に母上に報
 告す。母上。それ見たか兄を馬鹿にした物ではないぞと。
 打ち笑ひ給ひき。その頃帽子の事をカンムリと稱へたる
 もをかし。
 是も其頃の事。太鼓の撥といふ文句がありたるを。郷里に
 ては。琵琶三味線のをバチといひ。太鼓のはブチと言ひ習
 はしたるをもて。太鼓のブチと讀ますがよからんといふ先
 生あり。教員室にて議論になりたるが。篠崎といふ先生曰

く。富士太鼓といふ謠の文句に。「持ちたるバチをば劍と定め」とあれば。バチこそ正しからめと。此に争ひは止みたりといふ。

◎常ゆく安食の竹村屋に泊りたる時なりき。獨り燈のもとに物書きあたるに。おまき来て。ちよと御出で下さいと言ふ。階子を下りて下に行けば、女中も主人も皆集まりてどよめく中に。吸物椀の蓋をしたるが。二十人前程並べてあり。おのれも其一方に座すれば、主人曰く。是は暗汁とて。おのく持ち集まりたる品々を。暗き處にて盛り分け様々の汁にしたるなり。先生から御先に。どれにても御取り下さいと言ふ。

一番眞中なるを先づ取れば。誰もく皆一椀づゝ前に置きつ。蓋を取るや「やあ」といふもあり。「あら」と驚くもあり。笑聲一度にどつと起りたるが。己が處に来れるは。黒ずみたる汁の中に。結びたるやうの小さき物と。白いやうのべたくしたる物とが入り居り。味ひ見ればこは如何に。汁粉の露に觀世麩と生干瓢とが入りたるなりき。麩はまづからねど。干瓢は固くて食れず。是はと顔を擧めるはおたか。味噌汁に蜜柑の輪切とは滑稽なるに。鹽煎餅に栗饅頭のすまし汁と。おとみの呼ばりたるも。珍味なるべし。その外。汁粉の中から鯛が出て来る。鮎の甘露煮が出て来る。菟蓐が出て来る。露なき椀から一枚の煎餅が出て来る。大

笑なりき。

最後に重箱前に現はれ。當てゝ見よとの事なり。餅菓子といふものあり。豆といふもあり。餅といふもあれば。蕎麥といふもあり。皆あたらずして。五目鮓飯なりしこそ。甘口の跡には何よりなりしか。

◎記憶のよき人ほど羨ましきはあらず。稗田阿禮が古事記三卷。宣耀殿女御の古今集二十卷の昔はさしおき。近き頃聞き及びたるは。今より四五十年前の事にや。下總の宗吾靈社の寺に學僧あり。成田不動尊の本堂落成せし時。呼ばれて行きて。堂の三面に彫刻せる五百羅漢の名を。一より順々に空に稱へて書き取らせたるが。猶も稱へ違へもやあ

らんとて。更に逆まに讀み直して。五百の尊者を一つも誤らざりしといふ話は。今も傳へて記憶上の一奇談とす。今は世に亡き梅若實の若かりし頃。謠を習ひたる人の話に二百番の内。如何なる遠き物を持出だしても。實先生が教ふるに本を見る事なかりしには。驚きたり。其上日々教を受くる門弟。百をもて數ふべきに。今日はどこからと問はずして。その人々に教ふべき場所を諳んじ居りつゝ。さつさと謠ひ出されしには感心せりと。この梅若の地謠に鈴木誠といふ人ありしが。突然出されて困る物は。玉井と東岸居士の二番のみと。おのれに語りし事ありしを思へば。其外は皆記憶中の物なりしならん。

郷里の親友に石崎氏といへるは。醬油、藥品、塗物、小間物などを商ふ大店の主なりしが。幾百幾千と數ふる店の商品を。一々空に覺えゐて。それは何くの棚の何番目にて。直段は如何程なりと。奥に寢て居ながらも指し示すに。一つも違ふ事なかりしとぞ。

おのれも童なりし日は。暗記力強くして。唐詩選、三體詩、白詩選の類。大かた覺えゐたりしかば。學友船を海上に浮べて。東西二艘に分れ。詩吟の競争を爲さんとて。東船一詩を吟じ終れば。西船他の一詩を吟じ出だし。かはるゝ聲を絶やさず吟じ合ひて。種の盡きたる方を負と定めける時にも。一方の猛兵と選ばれたりしが。五十過ぎては既に驚

馬なり。されど琵琶行、長恨歌などの。今も難なく口ずさまるとは。忘れも得せぬ春の日長の半日を。木蓮咲きたる窓のもとに費して。讀みおぼえたる。十四の年の置みやげぞかし。

◎望月の謠本を出だして。「一夜の宿を御貸し候へ。」「あきまの事にて候此方へ御入り候へ」と謠ふ。「あきまは下宿屋めきたりとて。よくく見れば。『安き間の事にて候』なりしも可笑し。

又一人「あら馬鹿々々しや盗人よ」と。烏帽子折を謠ふ。濁を上下見ちがへたるにて。「あらはかばかし」にてこそ有りけれ。

◎國技館にて親鸞上人 遠忌追弔會ありける時。餘興に物

せられし三人片輪の狂言を見て。雑沓極めたる中なれば。其筋の如何は分らざりしかど。終りに似せ目くらの目があき。似せるざりの腰が立つ處を。上人の御利益にて片輪も忽ち直りたると思ひ。善男善女一同に念佛せしとは。滑稽にもあり。殊勝にも感じぬと。見たる人語りぬ。

◎市谷八幡の祭に里神樂あり。大蛇退治や天孫降臨などは事かはりて。瘤取話の一段ありしが。その瘤には金魚麩を用ひて。投げつくればべたりと面の上に引つ附くなど。女子供の喝采を博せしとぞ。新工風なるべし。

◎ある年の夏。郷里より東京に歸る學生三四人つれて東海道を來りしに。名古屋に泊りたる夜。いみじき暑さにて寢

苦しかりしが。一つ蚊屋に寝たる一人は。横にもならで夜すがら扇ぎくれたりし事。いつも人の親切といふ事を語る序には。思ひ出でらる。

◎「いかに見る人丸が目には櫻鯛」といふ句の意味は如何にと十四五なる子供に問へば。人丸は歌人なれば。飲んだり食ふたりの如き下品な事には心を向けず。鯛の如き美味なる物も鳥賊と同様に見なす意なりと。一人は答へ。歌聖なる人丸の目からは。凡人の珍重する櫻鯛をも如何に見るらん塵芥の如く卑しむなるべしと。一人は解しぬ。

◎わが郷里の宇和島には。蜜柑の種類にて美味に富める菓ものあり。リウリンと呼ぶ。文字をば李夫人と書く人も

あれば。龍鱗ならんといふ人もあり。李夫人は詩人なごの徒らなるべく。龍鱗こそ膚の光澤にあひて誠らしけれ。

◎羽後の酒田に行きたる時。遊廓町を過ぎたるに。こゝは臺灣といふ町なりと人の告ぐれば。かの地の女なご連れ來りて置く故の名かと問ひしに。あらず。臺灣占領の年に開きたる町なればとぞ言ひし。

◎同じ天井板をながめつゝ仰臥する事。十箇月に餘りぬ。せめて今少し涼しき處に居を移して。氣をも轉じ病體をも静養せばよかるべしと。人も勧め己れも進みて。近くの法身寺といふ禪寺の座敷を借る事になりぬ。時は九月一日の黄昏すぎ。用意宜しとて。打ち臥したるまゝ釣臺に移さる。

旅にては山駕籠にも荷馬車にも乗り馴れたりし身なれど。此乗物には始めてなれば。何となく面白き心地す。上覆の布の隙間より見れば。花の如き星は空に満ちて。前後を照らす提灯の光。行きては留まり。留まりては行く。一年近く室内を出でざる身には。夜景身にしむ秋の宵なり。聽て歩み少し緩まりて高き上る心地するは。山門を入りて玄關に着きたるなるべし。幼なき頃に目を隠され。人に二人して家の内を昇ぎ廻されたる結果。こゝは何く。座敷か臺所かと問はれて。思ひも寄らぬ處なりしよと。驚きては喜ぶ遊をせし事しばゝありけるが。五十四歳の今日。之を繰り返すも一興ぞかし。ふしどは十疊の間に定められぬ。

悠然看南山の文字は額に仰がれ。暗夜なれども松の姿と石
燈籠の影は。廣庭の一方に見ゆるといふなり。更けゆくま
ゝに。大久保ゆきかふ汽笛の遠音と。節まだ調はぬ虫の聲
のみ。をりく聞ゆ。

◎草刈る女どもの歌ふ小唄にも雅なるが多し。

君に別れて松原ゆけば。松の露やら涙やら。
沖の暗いのに白帆が見える。あれは紀の國みかん舟。
こいというたとて行かりよか佐渡へ。佐渡は四十五里波
の上。

伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ。尾張名古屋は城で持つ。
坂は照るく鈴鹿は曇る。間の土山雨が降る。

伊勢へ七度熊野へ三度。お多賀さまへは月まゐり。

などの如き。和歌にてはいはれぬ風調といふべし。

石の地藏さま天窓が丸い。鳥とまれば投島田。

滑稽おのづから噴飯せしむ。

わが故郷にて聞馴れたりし。

竹になりたや御城の竹に。諸國諸大名の弓矢竹。

は維新前後の頃なりしと覺ゆ。郷里の城山には大竹藪のあ
りしより起れるなれども。もとは。

芝になりたや箱根の芝に。諸國諸大名の敷芝に

といふを替へたるなりとぞ。

會津軍の白河城にて敗れんとせし前の夜。官軍の陣中にて。

綾の褥も今宵ぞ限り。明日は會津の土手枕。と放吟する兵士の聲を。遙に聞き附けたる時の心地には。とても明日の勝利は得らるまじと決心したりしが。果して然りき。唱歌の人心を動かすは疑ふべからずと。其時會津軍の勇將たりし故山川將軍の語られたる事ありき。◎幼児ども將棋の仕方は幾つあると問ふ。父の少年なりし頃遊びたるは。本將棋を始とし。ハサミ將棋、天狗將棋、ニヨキく、歩に歩、ツミ將棋、フリ將棋、ヌスミ將棋などなりといへば。其ニヨキくを教へてと請ふ。雙方に駒を三枚づゝ三列に並べ。一つづゝニヨキくと掛聲をして進ませ。早く敵の陣中に並べ終りたるを勝とすといへば。面白がりて

此二三日は學校より歸れば。ニヨキくの聲臥しゐる枕の近くに聞ゆ。將棋につきて思ひ出だしたるは。十四五の頃なりけん。道にて栗田の萬さんといふ人にあひたりしが。己よりは十ばかりも年長なりしかと覺ゆ。今日は半日留守番をせねばならず。是から遊びに來てよといふ。やがて伴はれて行きたるに。將棋を差さぬかとの事なり。下手なればとて斷れども。中々きかず。遂に一番打ちたりしが。素より覺悟の前とて。さんくんに敗北も敗北。全滅の浮目にあはされたる悔しさ。萬さんは僞ならんとつぶやく。是が誠の我力なりといへば。さらば私にだまされたるなり。或人より大和田さんは將棋の豪傑なりと聞きて。よき機會ぞと

挑みしに。なるほど君の下手なるには失望せりと笑はれて
止みたりしが。其頃おのれは。将棋にていつも全勝を得る
人一人あり。妹の静尾のみと誇りたりしに。此頃は十六
なる五月にも勝ち。十三なるゆた子にも勝ち。九つなる望
雄にも勝ち。大ぶん勇将にもなりにけり。

◎わが宇和島の詞にて幣帛をボンデンといふは。梵天帝釋
を祭る心が。乙女の翫ぶお手玉をイチドリといふは。古の
『いしなどり』の訛れるならん。大聲あぐるをオラブ。咳をす
るをタゴルといふは古事記などにある古言にて。按摩をヒ
ネリといふは、手先にて揉み廻す意なるべし。他國の人に
は。湯屋の三助などの貰ふ物とや間違ふらん。小手鞠の花

を鈴懸といふは。山伏の胸にある物に似たるよりの名なる
べく。松葉牡丹の事をフトンテンスといふは。外國語にや
知らず。御幣かつぎの事をゴダカキといふは。芝朶にて垣
を作りたる家の妻君。『し』といふ字を嫌ひて。芝朶垣をゴ
ダガキくと稱ふるより起りしとぞ。

◎新聞に平田内相談といふ見出しあり。平田ナイサウダン
と讀みて。内々の相談とも取らるべし。

◎客あり。雨ふりいでたれば。車一つ頼みてよといふ。侯
爵を呼び來れと下婢にいへば。侯爵が落ちぶれて車夫にな
りたるかと客驚く。いな車夫の姓が毛利なれば。その符牒
ぞと告ぐれば。安心して乗りて行く。

附 録

繭

と
も

り

終

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 繭, 終, and 繭]

[Small handwritten notes or stamps on the right edge of the page]

胡蝶

しのぶ草

寄月哀傷

秋の夜の月見るたびに浮ぶかな此の世にまさぬ君が面影
月影は曇り果てたる秋霧にむせかへりても蟲ぞ鳴くなる
月見つゝ君がむかしを忍ぶ夜に聞くも悲しき蟲の聲かな
なき人の面影うかぶ夕月に蟲もむかしをしのびてぞ鳴く
照る月も君なき世をや歎くらむ雲のたもとに面を覆ひぬ
てる月の中に君ます心地して傾く影の惜しくもあるかな
影清き月の桂もけふこよひなみだの露にしめるかなしさ
月見ればすぎにし君のしのばれて衣の袖は露けかりけり
さやかなる秋の最中の月見ても袖こそぬらせ君を忍びて
亡霊の月に宿らばさやかなる夜毎に出でゝあはまし者を
待宵の月は雲間にかくろひてむしの音かなし武藏野の原

(イロハ順)

- 東京伊藤ふみ子
- 東京伊東みち子
- 東京磯貝田鶴子
- 東京今井つゆ子
- 東京飯田季治
- 東京飯山ぎん子
- 東京飯山すぎ子
- 東京バルトン玉子
- 東京林璋子
- 大阪濱田毅郎
- 千葉濱野米子

あだし野の露の光を形見にて入りにし月の名残をぞ思ふ
あまかける君がみ魂の心地して雲にうする、有明のつき
久方のあまとぶ雁はつき見つゝしたふ心を君につげなむ
たえんゝになく蟲の音も身にしみて仰ぐも悲し待宵の月
照る月の光をあみし嬉しさも昨日なりけりまつよひの宿
よる波の悲しき聲をとめおきて大海の原に月は沈みぬ
なき君をしのぶ涙にさやかなる月の影さへ曇る今日かな
御謠のこゑも聞えぬこの秋は月もなみだに曇りがちにて
雁金もしのびに鳴きて渡りけり月影消えし雲のはたてに
秋の夜のさやけき月を眺めつゝ過ぎにし君が昔をぞ思ふ
あたらよの月は隠れてうば玉の闇路に惑ふ今日ぞ悲しき
やどりにし月もくもりぬありしよの面影しのぶ袖の涙に
故郷の山をば共に出でにしをわれを残して月は入りけり
見し影ぞ雲がくれぬる秋の夜はなほ長月と思ひしものを
ありし世の君を思へばさやかなる月も曇ると見ゆる空哉

東京濱野京子
東京橋村美篤
東京長谷川はる子
埼玉長谷川こう子
東京蓮岡晴子
東京仁科はつ子
愛媛西村守雄
大阪堀ひさの子
東京細川歌子
東京本多こう子
東京本間かう子
東京本間のぶ子
東京穂積陳重
東京穂積歌子
東京豊田満子

待宵の月なき夜半にしのおかなさやかなりつる道の光を
月影もいつしか消えぬ亡き人を忍ぶ心にうきぐもやたつ
思ひきや敷島の道を分けかへてつきの都に君いなんとは
待宵の月はふたゝびめぐりこむかへらぬ君が影ぞ悲しき
ありし世を忍ぶ袂のほころびてつゝむにあまる月の影哉
とこしへにあふぐもかなし中空に雲がくれにし待宵の月
有明の光うする、月見ても思ふはきみがよみぢなりけり
さやかなる今宵の月を眺むれば過ぎにし君の慕はるゝ哉
亡き君のかげやうつると望の夜の月の鏡を仰ぎてぞ見る
村雨に濡れまさりても行く雁は雲隠れにし月やしたへる
すみ昇る今宵の月を天がけり何處に君はみそなはすらむ
望の夜のみちたるかげも見えぬ間に雲隠れにし待宵の月
月影は昔も今も變らねど變り行く世のはかなくもあるか
待宵のまとる淋しくなりにけり待ちつる月の雲に隠れて
諸共にながめし月は今も尙かはらぬものをあはれ君はや

東京小畑榮子
大阪小原とき子
大阪小原關子
東京岡田すゑ子
東京岡村諒子
東京岡村たかえ子
東京岡村瀧子
東京岡本浪江子
東京小山まつ子
東京小澤千世子
東京小澤なほ子
東京小澤政胤
長野小澤明代子
東京若林一枝子
東京若林芝玉

惜めどもかひこそなけれ八千草の露分け入りし武藏野の月
 秋の夜の月にむかひて亡き人を思ふ涙にそでぞぬれける
 共に見し月は雲間にかゝれどもあはれ此秋君はいづらは
 この夕べ淋しき秋の月影に君がむかしのしのぼるゝかな
 いかばかり嬉しからましこの月の御姿うつす鏡なりせば
 この秋は袖に涙のしげゝればすむ月影もおぼろげにして
 あはれ〜君は何處に見ますらん此さやかなる秋の夜の月
 さらぬだに露けき袖を月見つゝ絞りもあへず濡す今日哉
 敷島の道にくまなき月影をなどむら雲の立ちかくしけむ
 ながめやる秋は昨日の秋ながら空行く月のかげぞ曇れる
 月ならば又てる夜半もあられしを雲隠れにし君の悲しさ
 月影は山のあなたに入りはてゝむなしき空に秋風ぞふく
 仰ぎてし月は雲間に影消えて露けき道にまどふ夜半かな
 仰ぎ見てたのめし山のかひもなく雲隠れぬる月ぞ悲しき
 亡き人をしのぶ涙の袖の上にやどれる月のかげぞ淋しき

東京河村きよ子
 東京河浦静江子
 東京加藤しづ子
 愛知加藤すま子
 東京龜井たか子
 東京上川井かま子
 東京神方美野子
 東京吉田輛子
 東京吉田清子
 東京吉田達子
 福岡谷井やえ子
 東京京橋のぶ子
 東京立田すゝ子
 栃木田村政重
 東京武田貢子

惜しと思ふ月は雲間に入りはてゝ残るは袖の露にざりける
 亡き君をしのぶ夕べは望月のさやけき影も曇りがちにて
 うちむかふ月の鏡にさやかにもうつるは君がありし面影
 君まさぬ垣根の尾花枯れ伏して月かげさむき待宵のやど
 此影にいかに泣きけん笑ひけん空にさやけき秋の夜の月
 今もなほ身にそふものは共に見し秩父の奥の夜半の月影
 ともに見し昔の影ぞしのぼるゝ君なき宿のまつよひの月
 うき雲に隠れし月を惜むにも定めなき世のなげかるゝ哉
 歌思ふこゝろも月も曇りけりことしの秋はなどて露けき
 謠ひつゝ君と見し世は夢なれや御墓を照らす秋の夜の月
 すみのぼる月に背きて君は今いかなる關路ひとり行くらん
 桐の葉にさす月影もこの秋はひとしほ淋し君まさすして
 さやかなる月の鏡にうつるかなはかなく消えし君が面影
 冬衣たゝんその日をまつよひの月ははかなく雲に隠れぬ
 夢さめて悲しき夜半の我心なぐさめがほにさゆる月かな

東京田代あき子
 大阪中谷三郎助
 東京中村千代子
 東京中島春江子
 福島中島角次
 埼玉内田重禮
 東京右川たか子
 東京梅澤ひで子
 東京梅澤ひで子
 福岡植木鋼子
 東京井上秋果
 東京井上じゆん子
 東京野田みゆ子
 東京野澤君代子
 東京大和田りよう子
 東京大和田五月

亡き君を忍ぶ夕べの悲しさにあはれをそふる三日月の影
かくり世のはてまで照らす月ならば影に歌よむ心傳へよ
ありしよの面影そゝろしのばれて又袖絞る月の夜半かな
亡き君にあひしは夜半の夢にして淋しくもるゝ窓の月影
鳥部山けぶりの間より待宵の月を見んとは思ひかけきや
しきしまの道にぞまどふこの夕べ待宵の月雲にかくれて
月影も今はその夜のかたみにて涙の露にやどるかなしさ
秋深み蟲の音だにも悲しきをあはれさ添ふる夜半の月影
月見つゝ歌ふにつけて言の葉の教への親ぞ忍ばれにける
おもひきや望の夜またで待宵の月は雲間に隠るべしとは
君まさばいかにうれしき宵ならん獨ながむるまどの月影
露深き庭に立ち出でゝ木の間もる月に昔を偲ぶ夜半かな
鳥部野のけぶりはかなき奥つきを照すも悲し秋の夜の月
照る月に君が昔やしのぶらむ聲をつくして蟲ぞ鳴くなる
仰ぎみし月は雲間に入りはてゝながめ淋しき待宵のそら

東京大槻たか子
東京大槻道三郎
東京大澤すま子
東京大森復一
大阪奥野正義
新潟久保ちとせ子
大阪山本嘉女子
大阪山本忠友
新潟松村いく子
東京松浦つぎ子
大阪松崎ふく子
東京松元愛子
兵庫増永せん子
東京藤川恒世子
茨城藤倉米子

世にまさぬ君が面影照る月に思ひうかべて忍ぶ夜半かな
中空に月の光の消えしよりゆきゝにまどふしきしまの道
たのみてしみ空の月の影きえてゆくてをぐらき敷島の道
てる月の御歌もいまは聞えじと思へばいとゝかなし此秋
待宵の名のみとゝめて月影はふたゝび見えぬ宿の悲しさ
ともに見し秋を思へば月影のさゆるも悲し曇る夜もうし
かざりとも知らで別れし有明の月の影こそ忘れがたけれ
亡き君のみ魂いづことながむれば月影のみぞ空に懸れる
見るまゝに同じ空なる月影のいかで今宵は哀れ添ふらん
敷島のみちの光の月かげをいかなる雲か立ちかくしけん
まつよひの月は雲間にかくれけり道の光に何をたのまん
世にましゝ影を偲びてながむれば涙に曇る秋の夜のつき
月のごと再び照らむ君ならば雲隠るともなげかざらまし
ありし世を忍ぶ涙にしぐれつゝはるゝ夜もなき月の影哉
月影は昨日のまゝに照らすなり歌賜はらん君もまさぬに

東京藤倉衣子
大阪藤江正治
東京舟橋さは子
神奈川福島孝子
東京福島貞子
東京富士谷成春
岡山小出かず子
兵庫小林杖吉
愛媛小林儀衛
愛媛小林まさ子
東京五島勘子
東京五島和枝子
東京五島多紀子
東京近藤さや子

さやかなる月も曇りて見ゆるかな消えにし君を忍ぶ涙に
空蟬の世になき君はさやかなる今宵の月をいかに見らむ
すみ渡る月に向へばさやかにも君が御面の忍ばるゝかな
なき人の歎きの霧のたちこめて再び照らぬ月ぞかなしき
鳴く蟲の聲も悲しき松かげの君のおくつき月ぞ照らせる
照り渡る月にむかしの忍ばれてさやかにうかぶ君が面影
あはれ君雲隠れにし月ならば又見む秋もあましましものを
さえ渡るみ空の月を仰ぎてもいよゝ露けき我たもとかな
悲しくも月は雲間に影消えてふみわけまどふ歌のなか道
あとゝめて尋ねもゆかん秋の月道しるべせよ魂の行方を
月影は雲隠れても又も出でむふたゝび見えぬ君の悲しさ
今よりは月の光をうしなひていづこたどらむ敷島のみち
ありし世の空なつかしき月影に哀れを添へて蟋蟀の鳴く
すみ渡る月にも袖をぬらすかな世になき君が昔がたりに
道てらす月の光の消えはてゝ頼む影なき今日ぞかなしき

愛媛近藤喜和子
東京荒西素子
東京荒木英子
東京淺野光秋
東京齋藤春子
東京澤原さみ子
東京佐藤ちか子
東京櫻井貞子
東京櫻井すみ子
東京櫻井清子
静岡桐田きり子
臺灣喜多村雪子
東京木村たき子
東京南繁子
兵庫箕浦とよ子

越えかねて君や歸らむ夕月夜てりな渡りそ死出の山路に
まどかなる月は照らせと葉なき言葉の山をいかに辿らむ
秋の夜の更け行く月の影見ればいと昔の忍ばるゝかな
ともに見し君が昔の忍ばれてつゆけき袖を照らす月かな
此秋も月はさやかに照せどもめでにし君は在さざりけり
諸共にめでしむかしを偲びつゝひとり眺むる月の露けき
月影は雲にかくれて待宵のまつかひもなくなりし悲しさ
はれやらぬ心もしらで月影のさやかに照るも悲しかりけり
秋の夜のさやけき道に向へども心の雲ははるゝまぞなき
いとゞしくあはれも深き秋の夜の月に昔の忍ばるゝかな
かきくたし降りくる雨に月影の消ゆるを見ても君ぞ悲しき
隠り世の君こそ偲べ廻り來て又よを照らす月を見るにも
打ち向ふ月より落つる心地して袖に散りしくわが涙かな
はかなしやいつまで君を忍べとか其夜ながらの月の光は
墨染めの夕べの烟ながむれば消えにし君ぞ悲しかりける

千葉柴田たか子
東京島田八重子
東京下井かめを子
東京平賀まつ子
東京平野みき子
東京平井直
東京平井とみ子
東京平井近江子
東京平井久萬子
東京樋口はつ子
東京森はつ子
東京森氏男
東京森岡ひろ子
東京茂木由子
東京須見節子

仰ぎ見し高嶺の月もいと惜しく一むら雲に隠れけるかな
 敷島の道を照らし、月影のをしくも雲にかくれけるかな
 唯ひとり虫きく秋となりにけり月見し友も今はなくして

大阪末吉増臣
 東京鈴木春枝子
 大阪末吉道久

し
 の
 ぶ
 草
 終

大和田建樹先生年表

年 齢	事 記	歌 文	著 書
一歳 <small>(安政四年)</small>	四月二十九日朝六つ時伊豫の國宇和島丸之内に生る通稱晴太郎		
八歳 <small>(元治元年)</small>	藩の右筆岸田藤右衛門翁に就きて手習を始め尤一二年前より家にてはいろはの類を習ひたり		
九歳 <small>(慶應元年)</small>	正月より中島源三郎先生に就き大學の素讀を始め○秋藩校明倫館に入り孟子より習ふ、始めて就きたる教師は小原三左衛門君なりき		
十一歳 <small>(慶應三年)</small>	和歌俳句の獨修を始め○中島先生に教へられて詩作をも始む		
十二歳 <small>(明治元年)</small>	藩儒加藤虎一郎先生の塾に入り小學の講義を聞き又輪講などをもなす○名乗を清秀と付く		
十三歳 <small>(明治二年)</small>	四書、五經、小學、古文眞寶等の素讀を終り培養(藩の中學校)に入學す専ら詩作に心を傾け長恨歌琵琶行を暗記せしも此頃と覺ゆ○始めて歌の添削を宍戸千建大人又柿崎大人に受く		
十四歳 <small>(明治三年)</small>	通稱を有と改む○始めて藩公の御前に孝經を講す○和歌を宍戸千建大人に學ぶ○此頃より八		
十五歳 <small>(明治四年)</small>	犬傳を讀む全篇大かた誦讀するに至れり藩の學制一變して國學大いに興る依りて藩校に		

大和田建樹先生年表

十六歳 (明治五年)

十七歳 (明治六年)

十八歳 (明治七年)

十九歳 (明治八年)

二十歳 (明治九年)

二十一歳 (明治十年)

二十二歳 (明治十一年)

二十三歳 (明治十二年)

二十四歳 (明治十三年)

二十五歳 (明治十四年)

二十六歳 (明治十五年)

二十七歳 (明治十六年)

二十八歳 (明治十七年)

二十九歳 (明治十八年)

三十歳 (明治十九年)

三十一歳 (明治二十年)

三十二歳 (明治二十一年)

於て教を穂積重樹、清家堅庭兩大人に受け國學に志す和歌又此二翁を師とせり

學制又一變して國學廢せられ普通學といふものを學ばせらる○文字小助業を命せられ青年塾の教師となる、月給一圓○此頃より翻譯書を讀む通稱名乗を併せて建樹と改む○小助業を辭し専ら國學を獨習す

春始めて旅行をなし讃岐の琴平に參詣す紀行に七十首の歌あり○秋東京に出づ

二月故ありて歸郷す○縣社の祠官毛山正廉君につき雅樂を學ぶ

一月廣島外國語學校に入り始めて英語を學ぶ

春季休暇に周防の岩國に遊び、夏季休暇に備後の福山に遊ぶ○此年語學校廢せられて縣立となり廣島縣英學校と改稱す

春退學して春葉新誌の記者となりしが秋又英學校の生徒となる○三月母上の逝去にて暫く歸省す

春病を得て醫師に廢學をすゝめられ暫く福山に療養して歸郷す○十一月全快して東京に出で本郷區元町二丁目に下宿す

三月交詢社書記となり社内寄寓す月給八圓○此年英語博物哲學等を獨習す

獨逸語を學ぶ○また羅旬語を學ぶ

讃岐道の記 (草稿今なき)

上京日記(同)

涙の玉串 (母上の喪にこもりたる間の記及び和歌)

一月東京大學書記となり博物場に勤む○今川小路に寓し再び裏神保町に移る○七月源氏物語の講義を始め聴者五名○俗人東儀彭賢君の門に入り雅樂を習ふ

六月東京大學編輯所の勤務に轉任す

久米幹文翁と共に安房めぐりをなし序に横須賀鎌倉に遊ぶ○九月六日東京大學古典講習科の講師となる○十一月裏神保町に借宅す家賃二圓五十錢○十二月五日飯田武郷大人の長女計伊子を娶る○奥井簡藏につき觀世流謠曲の稽古を始め一月觀世清孝の門に入る○六月飯田町六丁目に移る家賃三圓六十五錢

三月大學の改革により職を罷む○四月高等師範學校教授に任じ女子部を兼ね○六月長女木綿子生る○八月大阪に遊び歸途京都を経て岐草長良川の鶴飼を見る○九月三番町に移る家賃三圓七十五錢

三月相模に遊ぶ○五月佛蘭西語を始め○六月市ヶ谷仲ノ町に移る○八月木曾路を経て大阪に遊び歸省す此時家族を引纏めて上京せり(父上と妹てふ子とを)○十月籍を移して東京府士族となる

三月房州に遊ぶ○六月始めて熊坂の能を演ず○八月仙臺より松島に遊ぶ○九月箱根塔の澤に入る

相模紀行 木曾路日記

詩人の春 友千鳥二郎集

徒然草類選 (二冊) 友千鳥太郎集 書生唱歌

浦づたひの記 罪なくしての記

明治唱歌 第一集 第二集

三十三歳 (明治二十二年)

浴す○十一月大倉六藏に入門し小鼓を習ふ
三月鎌倉に遊ぶ○四月金春五十男の門に入り太鼓を習ふ後五十男歿したるを以て觀世流に改めたり○七月大阪和歌山奈良に遊ぶ○十月小石川區金富町に移る

三十四歳 (明治二十三年)

一月五日父上逝去し給ふ○三月伊豆に遊ぶ、落馬して手に綱帯して歸る○七月大和めぐりをなし歸路富士山に登る○九月小石川表町に移る○十二月三十一日二女さゝれ子生る

三十五歳 (明治二十四年)

一月逗子江の島に遊ぶ○四月官を辭す○四月十六日小金井の櫻を見る○五月上州伊勢崎に遊ぶ○八月武州御嶽に遊ぶ○十一月上州妙義山より碓氷峠の紅葉を見る○此年『國會』新聞に『能樂のしるべ』といふを出だしたるを始めとし絶えず論文紀行漫録能評を寄稿し又女學講義録及び『國文』にも筆執りたるもの多し

三十六歳 (明治二十五年)

二月より明治女學校の講義を擔任す○四月吉野及び京攝に遊ぶ○五月上州高崎の蛙聞きにゆく○八月國語傳習所夏期講習會に文法を講義す○八月家族引きつれ相州片瀨に遊ぶ○十一月日光の紅葉を見る○十二月伊勢參宮をなす○此年『國會』『國文』に寄稿し又早稻田文學に『謠曲と文學の關係』を書く

- 幼稚の曲 第一集
- いざり火 第三集
- 明治唱歌 第四集
- 幼稚の曲 第二集
- 友千鳥三郎集 山めぐり
- 古文讀本 六冊
- 明治唱歌 第五集
- あるらしの記 和文典 (三冊)
- 一夜の旅 初ほととぎす
- 涙の記
- 大阪、和歌山、奈良
- 花見の旅 片瀨の浪 瀧めぐり ぬけまわり
- 友千鳥四郎集 謠曲通解 八冊
- 尋常帝國唱歌 小學帝國唱歌 (二冊)
- 高等帝國唱歌 (二冊)
- 和文學史
- 通俗文學全書 (十二冊)
- 富士川舟

三十七歳 (明治二十六年)

一月鎌倉に遊ぶ○七月甲州に遊ぶ○九月より立教女學校の講義を擔任す○十月二十二日妻計伊子死去す○此年自由新聞、幼年雜誌、國文、教育時論等に書く時論には募集したる歌合の判をなしたり

三十八歳 (明治二十七年)

二月東京音樂學校作歌の囑托を受く○四月故河合淵齋大人の二女龍子を娶る○六月信州望月の講習會に講義す○七月より毎月一回武州岩槻講習會に講義す○八月一日より卅一日まで家族引き連れ鎌倉に海水浴をなす○十一月より毎月一回武州深谷講習會に講義す○此年幼年雜誌、教育時論國文等を書く

三十九歳 (明治二十八年)

一月銚子に遊ぶ○二月より露西亞語を始む○四月京都の勸業博覽會を見また紀州和歌山に遊ぶ○五月六日長男五月生る○六月信州小室講習會に講義し歸途巨隠山に登る○八月十九日より卅日まで家族と房州に遊ぶ○武州秩父に遊ぶ○十月より靜修女學校の講義を引受く○此年太陽、少年世界、教育時論等に寄稿す

四十歳 (明治二十九年)

一月信州屋代講習會に講義す○四月七日沼津に遊び翌日久能山に登る○五月十日粕壁在牛島の藤を見る○八月十一日より三十日まで家族引き連れ鎌倉に遊ぶ○九月十九日信州埴科郡教育會に講義し翌日冠着山に登り姥捨山に月觀をなす○十一月十九日三女かざし生る○此年少年世界

- 香の煙
- 望月日記
- 利根川舟 千里の春 戸隠詣 松風日記 秩父の雨
- 冬 濃 信濃 富士 藤
- かすかべの秋
- 山下水 國民文庫 (十二冊) 新文林 苔のしづく
- 明治女子書簡
- 日本大辭典 同小辭典 増補謠曲通解 (合本二冊)

四十一歳 (明治三十年)

太陽、教育時論等に寄稿す
一月信州松代講習會に講義す○二月四日京都に
行き英照皇太后陛下大葬を拜す○四月故郷宇和
島に遊ぶ○五月六日より埼玉久喜講習會に毎月
一回づつ講義す○此月より早稲田中學校の講義
を引受け明治女學校と靜修女學校とを辭す○六
月より石井一齊に入門し太鼓を學ぶ○八月二日
より九月八日まで家族と共に相州葉山に遊ぶ此
年別荘を新築したればなり○九月より青山女學
院の講義を擔任す○十月三十日信州小室にて一
日の講義を終へ碓氷を歩行して歸る○此年少年
世界、中學世界、教育時論、中央新聞等に寄稿す
一月常陸に遊ぶ○四月九州に遊び宇和島に寄る
○八月葉山に遊び又信州諏訪に遊び天龍川を下
りて歸る○十月四女ゆた子生る○十一月筑波山
に登る○此年太陽、國民新聞、教育時論に寄稿す
前年十二月廿八日より奈良、大阪、播磨、淡路
阿波に遊び一月十日歸る○四月香取鹿島息栖に
詣で銚子に遊ぶ○四月信州松代有志會及び小室
有志會に招かれ又小室婦人會にて講義す○八月
家族引き連れ葉山に遊ぶ○同月興津大山に遊ぶ
○九月静岡に遊ぶ○九月より女子語學校および
跡見女學校の講義を擔任す○此年太平新聞、學
窓餘談、禪宗、少年世界等に寄稿す

かなしみの京
都ふるさと日記
麥わら傘
ひな曇り

日本唱歌 (四冊)
作文寶典
雪月花

四十二歳 (明治三十一年)

四十三歳 (明治三十二年)

四十四歳 (明治三十三年)

四十五歳 (明治三十四年)

四十六歳 (明治三十五年)

四十七歳 (明治卅六年)

一月豆州に遊ぶ○此月より家の月次歌會を擴張
し待宵會と名く○三月立教女學校を辭す○四月
若狹越前越中加賀能登に遊ぶ○五月より江東國
文會を本所に起し毎週臨講す○八月佐渡講習會
の序を以て同國および越後に遊ぶ○九月青森に
行く○十一月京都大阪奈良箕面の紅葉を見る○
十一月五女めぐみ生る○此年中學世界、婦女新
聞等に寄稿す
一月三日より上總九十九里に遊ぶ○四月山陰道
に遊ぶ○習志野に遊ぶ○七月跡見花蹊女史の依
頼にて四季習字帖の消息文をつくる○八月舊友
門人に招かれて故郷宇和島に遊ぶ○九月門人な
る下總成田石井しげ子に招かれて茸狩にゆく○
八月海軍省教育部より軍旗唱歌依頼を受く○十
二月能樂史著述に着手
二月青山女學院を辭す○體量をはかる廿三貫八
百五十目あり○三月九州めぐりをなす○五月信
州上田教育會に招かれてゆく○池内信嘉氏の
『能樂』に筆とる○伊豆三島に遊ぶ○八月伊勢參
宮○九月二男望雄生る○成田に瓢聲會成り毎月
謠曲教へに行く事とす
一月江東國文會を待宵國文會と改稱す○四月大
阪の内國勸業博覽會見に行く○五月岩代郡山に
旅行○六月文部省の囑托にて國定讀本に入るべ

北ゆくかり
佐渡めぐり
けふの細布
名所の秋

謠と能
鐵道唱歌 (五冊)
航海唱歌 (二冊)
世界唱歌 (二冊)

つくも髪
初花日記
一夜のたび
宇和島日記
初茸狩
能樂叢談
歌の山口
節分詣の旅
木曾路の旅
鄙の長路
夏ごもり
まに／＼草
狂言評釋
能評雜話
亂舞雜話
雪の日
物見車
花がつみ
亂舞漫錄

藻鹽木
源氏讀本 (三冊)
歌まなび
甲斐唱歌
忠勇唱歌 (五冊)
花鳥唱歌
散步唱歌
文典唱歌
公徳唱歌
夕月夜
下わらび
和譯長恨歌
碓引
能の菜
豐年唱歌
長刀唱歌

四十八歳 (明治廿七年)

唱歌作る○八月奥羽地方旅行○牛込早稲田南町十三番地に家を新築す○十月家會の萬葉講義二十卷終る
一月信洲旅行○四月岩代郡山へゆく○五月香取神宮にまうづ○七月末より九月末まで北海道に行く○初雁會敷島會成れり是より隔月に一ヶ月滞在にて同地に出張する事となる
一月北海道旅行○三月武州松田に行く○四月埼玉群馬旅行○六月北海道に行く○八月信州旅行○十月北海道に行く

四十九歳 (明治廿八年)

○三月長女ゆふ子渡邊知吉に嫁ぐ○四月京阪旅行○五月より再び跡見女學校の講義を擔任す○同月江東國文會を待宵會と合併す○八月九州旅行○十月下總木下に遊ぶ○十二月愛知に行く○三月一日外孫知春生る○五月次女さゝれ死去す○七月僕摩質病にて右腕自由ならず悩む○八月能州和倉温泉に浴す○十一月下總香取に行く○一月野州小山に遊ぶ○二月銚子に行く○四月小山へ再遊○五月一日牛込區原町三丁目二十五番地の新築家屋に移る○八月武州高雄山に遊ぶ○同月池内氏に招かれ伊豫松山に旅行○十月野州日光に行く○十一月泉州牛瀧寺の紅葉見に行く○四月九州廻り○八月十四日面疔にて麴町區三番町木澤病院に入院九月七日退院○九月外孫菊子

五十歳 (明治廿九年)

五十一歳 (明治四十年)

五十二歳 (明治四十一年)

五十三歳 (明治四十二年)

生る○十月二十日春髓炎にて床に就く○十一月十七日長女渡邊ゆふ子清國漢口にて死去す
去秋よりの脊髓炎にて腰部以下不隨となり仰臥のままにて新年を迎ふ○二月不老會成る○三月双葉高等女學校及跡見女學校を辭す○三月海軍省教育本部より海軍軍歌の製作を囑託さる○六月向島百花園に待宵會二十年紀念會を開く○九月一日釣臺に昇かれて牛込區原町三丁目八十二番地法身寺に移る、海軍々歌製作の爲めなり○同月二日感冒發熱を推して海軍々歌を作り始む同月廿三日危篤に陥る○十月一日午前十一時二十分永眠

五十四歳 (明治四十三年)

岩つばめ
秋の和泉
歌だより
初病日記
蘆舟日記
蘭舟日記
黄海戦歌
威海衛攻撃歌
旅順閉塞唱歌
日本海々戦水雷夜襲唱歌

大和田先生年表終

日露開戦唱歌

軍艦唱歌

征露軍歌

海軍唱歌

滿州唱歌

家庭唱歌

軍神唱歌

能樂唱歌

農業唱歌

西比利亞唱歌

實さくら集

新編中學作文

文章組立法

新詩早學

秋の日記

書簡作法

つま木

をちこち

日記文範

謠曲評釋

(九册)

歌の手引
野菊
愛知縣唱歌
唱佐久間艇長
同

大和田建樹先生年表

大和田先生著書目録

書名	発行年月	冊数	頁数	書名	発行年月	冊数	頁数
徒然草類選	一八、二	一	一五	應用歌學	二六、五	一	一七
書生唱歌	一九、七	一	四	紀行文選	二六、六	一	一五八
詩人の春	二〇、二	一	四	歌曲評註	二六、七	一	一六〇
幼稚の曲	二二、三	二	二七	應用漢文學	二六、八	一	一七六
いさり火	二二、三	一	六〇	淨瑠璃評註	二六、九	一	一五四
古文讀本	三三、九	一	六〇	作文組立法	二六、一〇	一	一六八
友ちどり	三三、二	一	一五	書翰文組立法	二六、一一	一	一五〇
山めぐり	三三、三	一	八四	日本文人傳	二六、一二	一	一六二
和文典	二四、四	一	三五〇	明治書翰文	二六、一三	一	一一
あるらしの記	二四、八	一	四九	歐米名家詩集	二七、一	三	五九八
謠曲通解	二五、一	一	一六六	明治女子書簡文	二七、三	一	二〇〇
明治唱歌	二五、四	六	一六	文學遊戯	二七、四	一	一九三
尋常帝國唱歌	二五、五	二	七	新體日本歴史	二七、五	三	四三
高等帝國唱歌	二五、六	二	七	萬國歴史	二七、七	二	四〇四
和文典	二五、一〇	一	二〇一	英米文人傳	二七、九	一	一八八
修辭學	二六、一	一	三三	明治文學史	二七、二〇	一	四三
新體詩學	二六、二	一	一八〇	新文林	二七、二	一	四三
應用和文學	二六、三	一	一八〇	山下水	二八、五	一	一九二
狂言評註	二六、四	一	二六三	苔のしづく	二八、一〇	一	七三

大和田先生著書目録

大和田建樹先生著書目録

徒然草類選 一八、二 一 一五

書生唱歌 一九、七 一 四

詩人の春 二〇、二 一 四

幼稚の曲 二二、三 二 二七

いさり火 二二、三 一 六〇

古文讀本 三三、九 一 六〇

友ちどり 三三、二 一 一五

山めぐり 三三、三 一 八四

和文典 二四、四 一 三五〇

あるらしの記 二四、八 一 四九

謠曲通解 二五、一 一 一六六

明治唱歌 二五、四 六 一六

尋常帝國唱歌 二五、五 二 七

高等帝國唱歌 二五、六 二 七

和文典 二五、一〇 一 三三

修辭學 二六、一 一 一八〇

新體詩學 二六、二 一 一八〇

應用和文學 二六、三 一 一八〇

狂言評註 二六、四 一 二六三

應用歌學 二六、五 一 一七

紀行文選 二六、六 一 一五八

歌曲評註 二六、七 一 一六〇

應用漢文學 二六、八 一 一七六

淨瑠璃評註 二六、九 一 一五四

作文組立法 二六、一〇 一 一六八

書翰文組立法 二六、一一 一 一五〇

日本文人傳 二六、一二 一 一六二

明治書翰文 二六、一三 一 一一

歐米名家詩集 二七、一 三 五九八

明治女子書簡文 二七、三 一 二〇〇

文學遊戯 二七、四 一 一九三

新體日本歴史 二七、五 三 四三

萬國歴史 二七、七 二 四〇四

英米文人傳 二七、九 一 一八八

明治文學史 二七、二〇 一 四三

新文林 二七、二 一 四三

山下水 二八、五 一 一九二

苔のしづく 二八、一〇 一 七三

日本大辭典	二九、一〇	一七九
謠曲通解	二九、一一	一七九
日本開闢	二九、一二	一七九
畝傍山	三〇、一	一八〇
三韓征伐	三〇、三	一八〇
少年立志編	三〇、三	一八〇
日本小辭典	三〇、四	一八〇
聖德太子	三〇、五	一八〇
菅公	三〇、六	一八〇
九郎判官	三〇、六	一八〇
日本唱歌	三〇、六	一八〇
作文寶典	三〇、八	一八〇
雪月花	三〇、九	一八〇
曾我兄弟	三〇、一二	一八〇
惡七兵衛	三〇、一二	一八〇
相模太郎	三〇、一二	一八〇
楠公	三〇、一二	一八〇
日本歌謠類聚	三〇、三	一八〇
日蓮	三〇、四	一八〇
大塔宮	三〇、七	一八〇
豊太閤	三〇、八	一八〇
七本槍	三〇、九	一八〇
關ヶ原	三〇、一〇	一八〇
水戸黄門	三〇、一二	一八〇

四十七士	三一、二	一八〇
謠曲文粹	三一、一	一八〇
平田篤胤	三一、二	一八〇
新撰假名遣活法	三一、三	一八〇
櫻田門外	三一、四	一八〇
七卿落	三一、五	一八〇
彰義隊	三一、七	一八〇
藤田東湖	三一、七	一八〇
城山	三一、九	一八〇
平壤	三一、一〇	一八〇
深山櫻	三一、二	一八〇
威海衛	三一、三	一八〇
鐵道唱歌	三一、五	一八〇
謠と能	三一、八	一八〇
世界唱歌	三一、一〇	一八〇
航海唱歌	三一、一二	一八〇
源氏讀本	三一、四	一八〇
歌まなび	三一、四	一八〇
藻しほ木	三一、八	一八〇
下わらび	三一、七	一八〇
能のしをり	三一、三	一八〇
碓引	三一、二	一八〇
實ざくら集	三一、六	一八〇
新編中學作文	三一、四	一八〇

旅路	三九、七	五四
文章組立法	三九、九	五四
新體詩早學	三九、一〇	五四
秋の日	三九、一〇	五四
書簡文作法	四〇、二	五四
つま木	四〇、五	五四
をちこち	四〇、七	五四
日記文範	四〇、八	五四
謠曲評釋	自四〇、九	五四
野菊	至四〇、九	五四
歌の手引	四一、四	五四
合計九十七種	百五十一冊	五四
外に唱歌書數十種	三三五四五頁	五四

遺稿 (未刊の物)

日記	(明治十六年一月一日より四十三年九月廿五日まで)	四十四冊
旅日記	(旅行中の日記)	百五十四冊
孤燈	(短文章稿、此内公刊書中に入りたるもあり)	五十一冊
さいけの花	(短歌詠草)	十三冊
待宵詠草	(同上)	四冊
十六夜詠草	(同上)	三冊
栗の花	(長歌詠草)	三冊

大和田先生著書目録

大和田先生終焉の記

福島 四郎

昨秋以來脊髄炎にかゝりて、腰部以下不随となり、上半身にのみ其の生命を宿して、一室に仰臥し給へりし先生は、今年三月海軍省教育本部より軍歌の製作を囑托せられ給ひしが夏の初め頃迄には、御病癒えて起ち給ひぬべしと、松浦主治醫の言明せしを、たゞ慰めのそら言と知り給ふべき由なれば、六月末を期限として、固く引受け給へり。されど、菖蒲は咲き、螢は飛び初められたれど、御病は依然として元のまゝなり。一ヶ月の延期を乞ひて、それも満ち、更に一ヶ月を延べて、八月も過ぎぬれど、御容態は變りなし。兼てかりそめの契りをも違ひ給ひし事なき先生は、此の上延期を乞ふ事のいかに罪深しとや思しけん、九月一日といふに不随の身を釣臺に昇かれて、近傍なる法身寺の一室に移り給へり。さるは、朝夕に出入る人を避けて、専心海軍々歌の製作に従事し給はんが爲めなりけり。かくて、翌二日には黄海々戦、三日には威海衛攻撃および旅順の閉塞、四日には日本海々戦の水雷夜襲、四篇の軍歌を一氣に物し給ひ、尙續きて物せんとせられしが、兩三日前より感冒の氣味にて、御熱少しありし事とて、以後の筆は進まず、剩へ身心過勞の爲め、御元氣いたく衰へ給へり。一年餘り仰臥の儘なる大病人が、かく過度に身心を勞して、障らぬ事のあらんやうなく、熱は去らんとして去

らず、二十日頃には容態たいならず見受けられたり。無論松浦主治醫は、しばしば忠言を試みたれど、例の物固き御氣質の、やみ給ふ事能はざりしならん。

二十日に御葉書あり、今宵にても来てくれずやとなり、御筆の跡いたくふるへて、いと心もとなく見られたれど、其夜は社用にて遅く歸りければ、廿一日早朝伺ひたるに、思ひの外に衰へ給へり。海軍々歌に就て二三の御頼み事ありたるを、快く御引受申し尙さまぐ慰め參らせて罷りぬ。

廿三日、危篤の状態に陥らせ給ひぬとの報ありければ、取るものもと敢へず駈けつけたるに、げにもいたく衰へ給ひぬるかな、御眼を開きて熟視し給へども、物はたまはざりき。岡村諒子夫人より手製の鯛の潮汁を、さめざる内にとて自轉車の使にて贈られたるを、うれしげに受取られたるが、二匙ほどにて、もう澤山なりとて眼を閉ぢ給ひぬ。其の夜は、夫人および河合千代子氏と共に、御枕元に明かしつるが、半ば昏睡の御状態なり。曉近き頃、葉書もて來よとて、鉛筆とりあげ給ふ、先づ表を書き給ふを見れば、松浦醫伯に宛て給ふなり、裏を返して、暫く考へ給ひし後、松浦大明神と一行に書き、又暫く考へて、同じ文字を並べ書き、かくて、松浦大明神の字を五つ並べて書き給ひ、投函せよと渡し給ふ。昨日夕方、同醫伯の注射を受けて苦痛を免れ給ひし禮状なりけり。

二十四日には、同じ門下なる大森復一、本間かう子の兩人、徹夜の看護申しあぐ。

二十五日御手紙届けり、封筒の御筆跡、前の葉書とは變りていと確に、平生に異ならざれば、先づ安

心して封切りたるに、中には面白き漫畫あり、仰臥の病人の側に、一男一女が介抱せる状にて、上には廿五日午前三時廿五分と書き、半面には一首の狂歌あり、

おつやにはつや／＼あらずゆりかごに愛兒ねかするかあさまをばさま

御自分を幼兒に比して戯れ給へる御洒落、危篤の病人とは思はれず、聊か心強く思へりしに、午後には又もや御容態かはらせ給へりとの報あり、吃息間斷なく出で、いかにも苦しげなり。

此の日、牛乳二勺と肉汁九十勺分との外、鐘詰の桃の小片、栗二個を食し給ひ、サイダー、レモナード、氷にて、折々口中を濕し給ふのみ。松浦氏來りて午前と午後二回の滋養灌腸を行ふ。尿は八百五十瓦、御腦は絶えず氷にて冷やし參らす。見舞に來りし人々は、親戚の人々の外、島田八重子、山脇夫人、櫻井貞子、中村千代子、堀田きね子、柴田たか子、平井とみ子、近藤さや子、大森復一、本間かう子、若枝一枝、岡村たかえ、吉村達子等の門人、法身寺の内室と隣家の川上文夫氏とは、親戚の人々と共に親切に世話せらる。こよひは藤倉米子、飯山すぎ子の兩氏、御枕頭に夜を明かす。

廿六日七日は、御容態別に變りも見えねど、牛乳は一滴も口にせられず、肉汁の量もいたく減じられたば、御衰弱漸次に加はりゆく。一二の新聞紙に、先生危篤の報出でたれば、見舞の人々陸續として絶ゆる事なし。

廿八日午後五時、松浦國手は、いよ／＼御臨終の期近づけりと宣告す。夫人および五人の御子、五月、

かざし、ゆた子、めぐみ、望雄其外親戚の本多夫人、河合千代子、宇田川夫人、居合せたる門人おのれの外に、大森、本間、若林、藤倉、近藤、平井など皆驚きて御枕邊に駆け集りしに、五時五分、朗々たる聲を放つて謡曲「羅生門」の一節をうたひ給ふ。「つくく」と春の詠めの淋しきは」といふより、「頼みある中の酒宴かな」まで、御息切れもせず謡ひ終りて、「分つたか」と問ひ給ふ御聲は既に微かなり。障子の外には、秋雨蕭々として物静に、山茶花の一輪落ちて聲あるが如し。

此の後は、注射の力にて幾時間かの御生命を伸ぶるのみぞとて、松浦國手は一時間毎に鍼を刺し、二十九日の正午、是が最終なりとて食鹽注射を行ふ。

別室にて容態尋ねに來れる各新聞社員に應接し居たる廿九日の午後八時頃、御脈今絶えたりとの報あり、胸つぶれて御病室に駆けつけければ、御心臓のみは尙微に働けりといふ。今は、や施すべき術もなければ、人々御床の周りを圍みて、最終の御時を待ちしに、不思議にも夜の十時頃より漸次元氣出で來給ひて、絶えたりし脈は再び通ひ、口は再び物いひ給ふやうになれり。復活とはかゝるをいふなるべしとて、人々互に慶し合ひ、打ちしめりたりし病室は俄に活氣づきぬ。大阪なる堀ひさの氏は、今日看護の爲め出京せり。此程より見舞に來られし知人及び門下の人々、前に名をあげたる外は左の如し。

關川芳太郎(成田)、岡本貫一、池内信嘉、安田暎子、高橋義正、博文館、大谷貞三、跡見季子、谷内

正二、宍戸四郎、吉田頼子、宇野清子、河野岸子、大竹毅、小畑やえ子、村田芳助、石井しづ子、西野虎吉、高橋四郎、女子高等師範學校同級會總代(十文字)と子、半田のち子、甫守ふみ子、井口あぐり、長岡とよ子、河野きし子、内山たけ子、須永正方、田村虎藏、龜井たか子、森氏男、岡村諒子、森律子、上川井かま子、武田貢子、平井直、京極りう子、増田たき子、黒澤夫人、茂木よし子、齋藤精輔、荒木英子、塚越もと子、松田清子、上眞行、笹川清子、野田みゆ子、小澤政胤、小澤ちせ子、高濱 清、水田恭太郎、觀世清廉、後藤夫人、大野市太郎(成田)、日高藤吉郎、岡村銳介、穂積陳重、小山作之助、鈴木壽松(成田)、立田すゝ子、川合いね子、舟橋さほ子、石井たか子、穂積重頼、服部琴子、關谷重、赤川寅太郎、皆川季孝、平井近江子、中川謙二郎、小澤夫人、長岡とよ子、關川安次郎(成田)岩井くら子尙洩れたるも數多あるべし。本多、飯田、河合、宇田川など親戚の人々は、名をあげるまでもなからん。

その後の夜の交代は左の如し。

二十六日、松浦醫學士、十時醫士、本多夫人、關川安次郎、法身寺内室、福島四郎
 二十七日、十時醫士、宇田川御夫婦、中村千代子、河合千代子、大森復一、川上文夫
 二十八日、松浦醫學士、十時醫士、宇田川夫人、本多夫人、川上文夫、福島四郎
 二十九日、吉村達子、堀ひさの、近藤さや子、本間かう子、若林一枝、飯山すぎ子、大森復一、宇

田川夫人、河合千代子、大野市太郎、關川安次郎、福島四郎、

二十九日の朝、本堂にて始まりたる讀經を聞かんとて、觀音經の折本を手にし給ひけるが、本堂遠くして聲定かならざるにぞ、命じて御床を隣室に移させ、普門品第廿五の處を開きて、其處か此處かと求め給ふ程に、本堂の讀經は、や終りぬ。いと口惜しげに見られけるを、住持聞きて氣の毒がり、再び繰り返して高聲に讀誦し、こたびは遺憾なく聞き終り給へり。

此の程は、別に海軍々歌の事口にはし給はねど、病前の状態より推して、深く氣にかゝり居るに相違なければ、當路の人に乞ひて、該軍歌の爲め意を勞せざるやう慰めて貰はゞ、いかばかり最終の安心を得しめ參らすべきと、岡本貫一氏の注意により、己れ海軍省に出頭し、軍歌の責任者たる山崎中佐に面會して、依頼したるに、快く承諾して、中佐直に病床に臨み、軍歌は全快の上ゆるゝにてよければ、此の爲め心を勞し給ふなど、親切に慰められけるが、先生はいとうれしげに謝意を表せられたり。その夜半、御氣分もいとよろしげに見られたるが、やがて右手もて、空間に畫やうのものを暫く書かせ給ふ、何し給ふぞと堀氏の問ひ參らせたるに、今道成寺の舞がすんだ處だと仰せらる。

三十日の曉方、筆を求められ、側なる吉村氏に紙を持たせながら、書き給へる文字、

夜があけたらすぬくわをたのむ〜〜〜

是は去にし日、中村千代子氏の持參せし水瓜がいたく御口に叶ひしより、今一度と望まれしなりけり。

思ひきや此の文字が遂に先生の絶筆とならんとは。

此の日宇野清子氏より、手製のゼリーを贈られたるが、うまし〜とて頻に進みぬ。さて昨夜より不思議に御容態よろしければ、松浦國手も意外の面持にて、もし此分にて尙一晝夜繼續せば、或は危篤の域を脱するやも圖り難しといはれ、人々も何とかしてとて、今まで絶望の雲に掩はれたりし御病室に、一道の光明を認むるやうなりぬ。

夜あけて御容態ますます宜しげなれば、泊りし人は大方歸りぬ。夫人は、長男五月君(過ぎつる日より病みながら尙父君の疾患を氣に)の衣類を取來らんとて、家に行き給ひ、僅に堀ひさの、龜井たか子、若林一枝平井近江等の門下のみ寺に止まり居りし午前十一時頃、今迄元氣なりし先生の容子は俄に異狀を來せり。夫人が報を聞いて驚きて駆け歸り給ひし時は、先生は既に夢幻の境に入り給へるもの、如く、識別し給ふ事能はざりき。松浦醫士に電話かけたるに、今急患者ありて外出中なりといふ。使して近傍の醫士を招きたれど、急には來てもくれず、己れも生憎居合せざりければ、婦人のみにて爲すべき術を知らず、たゞ騒ぎてのみありける處へ、門下なる赤十字社病院の看護婦岡田すゑ子氏來れり。君は過ぎつる日より、水難救護のために派出を命せられて、地方を巡回し居たりし爲め、電報も行き違ひになり、今やう〜汽車にて歸り着きたるなるが、人々大早に雲霓を望みたる如く、岡田氏が靴をぬぎもあへぬに、手を取り腰を押して御病室に連れ行けり。時に十一時二十分、御心臓の働きは既に休止

し、御魂は最早此の世のものにてあらざりしといふ。
おのれの駈けつけたる時は、先生の面はすでに白布もて覆はれたりき。あなあはれ。夢か夢にあらず、
うつゝか現なり。わが待宵舎大人は、かくして遂に神さりましつるなりけり。

大和田先生終焉の記終

待宵の月かけ (大和田建樹大人逸事)

- ◎待宵舎大人の肥満の體格は誰知らぬ者もない程であるがいつぞや九州旅行の時汽車の中で乗合の客が東京の人と聞き頻りと回向院の話をしかけるのでよい加減に受容へして居られた所が相手はいよいよ熱心に泉川の手はどうの釣出しはどうのと専門的になつて來たので私は一向素人で分りませんと答へられると相手は頗るきまり悪げに「それでは親方は年寄じやないのですか」
- ◎伊東温泉へ旅行された時とか濱が遠淺のため解も汀から十間ばかり此方で止り乗客は皆船頭に背負はれて上陸するのであるが先づ女子供から始めて大人は最後に取残されたさて數人の船頭は互にお前ゆけイヤお前こそと競合つて居たが屈強な一人がとう／＼やつて來て背を向けた大人は靜に負さつたが船頭は一步も足が進まぬ苦しげな聲を絞つて「旦那すみませんが涉つて行つて下さい」
- ◎明治三十五年二月十日の日記に、けふ體重を量りたるに二十三貫八百五十匁ありと記してある。
- ◎體格に於て肥大なる大人は精力に於ても亦偉大であつた著述に熱中されて居る時は朝は未明から夜は一時二時まで食後の休みもロクに取らないで筆を運ばれる事が屢々であつた或る時書生が先生はお眠りにならないでも御仕事が出来さうですわねといった處が大人答へて曰く「學生時代には三晝夜一睡

もしないで勉強した事もあるが翌日普通の勤務を果した今(四十二の時)でも後の疲労さへ構はなければ五日間位の徹夜は出来やうと思ふ』

◎大人は非常に自信力が強く一度決心された事は誰が何んといつても聞かれないあまりクドク勸告したり諫止したりすると百雷の一時に落つるが如く大喝される此の大喝を食はされると大抵の者は三尺位飛退く

◎所がこゝに不思議な事がある本年六月待宵會二十年紀念會を催した時各醸金者に大人肉筆の色紙を頒つ約束であつたので幹事の者が揮毫を依頼すると病氣が癒つてから羽織袴でも着けて謹書するからとてどうしても聞かれぬ幹事は今更社會に對する公約の履行が出来ないでは困る仰臥のまゝ願ひたいと迫る二三回押問答して居る間に例の大喝が出さうになつて來た病體を激せさせては濟まないと思つて其場は其まゝに置いたが後に夫人の助言によつて漸く揮毫せらるゝ事となつた蓋し再び起てない事を虫が知らせて居たのであらう

◎今日でこそ、日本の文學史には必ず謠曲の一部門が設けられ、學校の講堂で謠の文句が講義せらるゝ事もあるが、二十五年も前には、能や謠は一部の道樂に止つて、純文學とは殆ど没交渉であつた此の時代に、謠曲の文學的價值を認めて、之を學界に唱導し、室町時代の文學史中重要な地位を占むるまでに至らしめたのは、確に大人の功である。大人一人の功といへないかも知れぬが、大人は確

に主動者の一人に相違ない。

◎大人は、謠曲の文學的價值を認めしめたのみならず、又謠曲の趣味を普及せしめられた。今日謠曲全盛の世となつて、到る處に『花咲かば』の聲が聞え、天狗連がそこにもこゝにも出現するに至つたのは、大人の『謠曲通解』が興つて大なる力をなして居る、現に看板を掲げて居る謠曲の先生達も拍子板と共に一部の謠曲通解を必備品として居るが、この點に於て、大人は謠の先生の先生であつたといつてよい。

◎大人は又、謠曲文學家としてのみではなく、謠や能の實技に於ても、先生の先生たる値打があつたあの梅ヶ谷をこのけの太腹の底から、瓢箪形に押し出ださるゝ朗々の聲は、空行く雲をして足を止めしむるに足り、裝束つけて舞臺に舞はるゝ時は、専門の能役者も感に入つて見つめる程であつた、内外二百番の謠、何の曲でも全文を暗誦されて居たのは、僅少なる専門家を除いて類はあるまい。大人の謠の師は、先代の觀世家元清孝である。

◎大人の交際嫌ひは有名なもので、舊藩主伊達侯へすら一度も伺候された事はなかつた。當代に名を知られて居る國文學者は、大抵以前の友人であるが、いつの間にか疎遠になつてしまひ、年始狀の贈答すらも絶えたのが多い。是は大人に取つて非常な損で、門下生の私に遺憾とした處であるが、門下生の宅へは屢々遊びに行かれ、盃を手にながら當座をして、無上の樂みに感じて居られた。

◎酒は非常に好きであつた、量は、若い時は大分いけたやうだが、最近數年間は三合を越えない位であつた。小さい盃で、チビリ／＼やりながら、少し廻つてくると、狂歌が出る、謠が出る、が少し過ぎると、必ず居睡りが初まる。酒後の居睡りは大人の癖で、門下に有名なものであつた。

◎大人の日記をつけるのに忠實であつた事は驚く外ない、明治十六年一月から始まつて、四十三年九月廿五日即ち危篤後二日まで、一日の休みもなしに記入して居られる。其日記は大部分反古紙の裏を用ひられて居るが、積みあげれば數尺に達する。

◎旅行の時は手帖を用意して、之を日記とせられる。此の旅日記の手帖が、百五十四冊あるから、大人は即ち百五十四回旅行せられたのだ。旅日記の中には、宿屋の食事の献立もあれば、小遣錢の控へもある、折々は景色の寫生などもしてある。

◎旅行して友人や門下の家に泊られた時は、酒を強ひられて、日記をつけたり紀行を認められる暇がない、その時は、一寝入りして夜半に眼を覺まし、床の中で認められる、いかに長途の疲れがあつても、いかに大酒の後と雖も、嘗て日記を缺かされた事はない。

◎大人の旅行癖は多く比を見ない。足跡天下に遍しとは全く大人の事で、別に見るべき奇の無い所でも、未見の處でさへあれば一寸した機會を以て喜んで行かれた。病中仰臥のつれ／＼に懷中地圖を抜いて、嘗て通過された國々に朱線を引かれたが、島國を除けば、北海道と九州とに二三ヶ國を餘すのみで、他は悉く朱線に貫かれた。

◎大人の旅行された處には必ず其の紀行がある、大人の紀行は、當世若手文士の如き絢爛華麗は無いが、平淡清楚とことさしていはれぬ氣韻と品位とがある。絢爛華麗は學んで至るべく、平淡清楚は天才にあらざれば能はぬ。紀行文の作家として、大人は確に天下一人であつた。

◎紀行文中歌を挿む事に就て、大人はよくいはれた『多くの紀行文を見るに挿まれて居る歌が無用の長物になつて居る、例へば散る花雪の如しと文章に書いて置いてすぐ次に散る花の雪とふりくるなど、文章の語を繰返して居るのが澤山ある。是では歌を挿む必要がない、源氏物語はさすがに此の邊の用意が周到で、歌はよく文を助け其の間に重複も支離もなく、歌文を一貫して堂々たる一大文章をなして居る』と、大人の紀行文中歌の挿まれて居る處を注意して見ると、成程此邊の用意が明かに看取される。

◎大人の狂歌に巧であつた事は、恐らく世人の意外とする所であらう、無論これは大人の本領でないから、酒席などで詠みすてられるだけで、手扣などは残つて居らぬ、而も、二三門下の記憶に存して居る者を數へても、本稿の數回分を費すに足る。

◎一門人の家で歌の會を催し、酒後其の家の細君が飯櫃を持つて出た處、先生直に筆をとつて
お六々しきお七が來たのかと思へばおはちおくさまの影

と書かれた、飯後柿の實を盆に載せて運んで来た細君、今度は此方から『先生又何かお出来になりませんか』と催すと、言下に

奥様がお臺所でかつをぶしかきの實こそは嬉しかりけれ

◎門人大森復一氏の家の會で手打の蕎麥を御馳走して頻りに強ひて居ると、

復一つくとて名もしるき蕎麥の大もり重ねつるかな

とやられた

◎門下の一令嬢『夜蒲團から足が出て困る』と話して居ると、大人側耳にはさんで、直ぐ

ながらん蒲團のたけは短くていらぬ娘のせいの高さよ

など悪口をきかれた

◎跡見女學校の修學旅行の時、どういふものか汽車の進行が鈍かつた、すると口わるの廂髪令嬢手帖

の紙の端に、

師の君のお身の重さにいつよりも歩みの遅きこの車かな

大兵肥満の大人は直ちに

大石の重しもなくば山風に四方の廂の飛びもこそすれ

とやられて令嬢顔色なしさ、

◎深川の森田よし子氏(今の茂木夫人)は門下の中で一番背の高い婦人であつた、ある時古語の『ものから』の説明を乞うたに、「から」は「ながら」の義であると一通り説かれた後、

旗竿にあらぬものから深川のよし子の背の高くもあるかな

是にて知るべしと示された。

◎大人の早歌は有名なものであつたが、尤も人を驚かされたのは春木つぎ子嬢(今の松浦醫學士夫人)宅での百首會の時であつた。明治三十五年十月二十一日、四谷區舟町の邸で開かれたが、午前八時に詠み始めて、午後七時十分までの間に、三百十二首をよまれた。即ち十一時間と十分の間に三百十二首だから、平均二分強に一首の割となる、其中に晝飯の時間も加はるのだ。その時春木嬢は百首、堀ひさの氏は百三十首よんだ。

◎卑猥なる俗謠を驅逐して、清新なる唱歌を流布せしめたのは、小學校の力に相違ないが、功の半は作者の先輩たる大人にも分たねばならぬ。作者として技倆はいふまでもなく、其の數の上に於ても、大人は實に日本一であらう。作られた唱歌の數は、合計千三百餘編、その一編にも鐵道唱歌のやうな長い者がある。

◎小學校の課程表などの中に、漢字交り文といふ名稱があるが、之は二十年前頃までは假名交り文と稱して、文部省の法令にもさうあつた。大人は日本の文章を假名交り文などいふのは本末轉倒だ。漢

字交り文でなければならぬと主張され、遂に其の通り改まつた。

◎学校の卒業式などで、祝文や答辭を朗讀するのに、明治何年何月何日と其の日の日付を讀みあげるのは滑稽だ、契約の證書か何かを誰かが代讀するのなら格別、本人が其の日に其の場で讀みあげるに、明治何年何月何日と斷る必要はない、日付は後の参考のため記入しておくとしても讀まないが可いとは、大人が常に主張せられた所であるが、世間一般今尙此の滑稽を繰返して居る。

◎大人は常に床屋主義といふ事を主張されて居た。是は、表構への立派な大きな床屋は、兎角下剃に任せるから難有味が少いが、小さな床屋は少々不潔でも主人自ら手を下して呉るからとて、近傍の小さな床屋の常客となつて居られた。徒らに門下生の吸集に腐心されなかつたのは、此主義からである。

◎大人の本領は、謡曲であるか、和歌であるか、唱歌であるか、はた紀行文であるか、殆ど端睨する事が出來ぬ眞に畏るべき多才の人であつた。その一方面だけの事でも、委しく書けば限りがない。

待宵の月かけ終

明治四十三年十一月十六日印刷
明治四十三年十一月十九日發行

非賣品

發行人 大和田りよう

東京市牛込區原町三丁目二十五番地

編輯人 福島四郎

東京市小石川區大和町九番地

印刷人 緒形功

東京市神田三河町二丁目十四番地

版權
所有